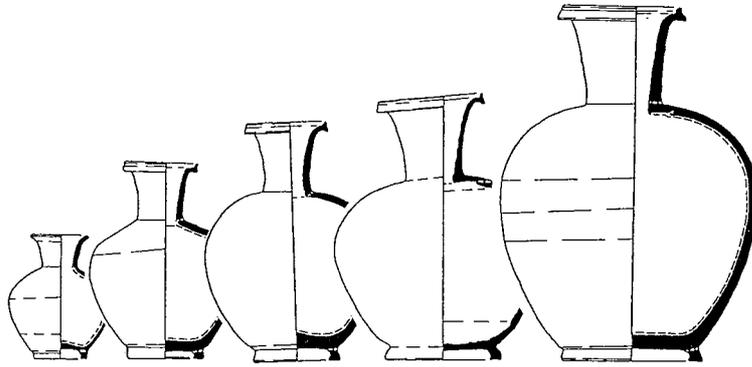


長岡京跡右京第668次 井ノ内遺跡 発掘調査報告



2001

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

**長岡京跡右京第668次
井ノ内遺跡
発掘調査報告**

2001

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



調査地周辺の航空写真（南から）

長岡京跡右京第668次調査

巻頭図版
一



長岡京期の土器

序 文

昨年は遺跡の捏造問題が考古学会のみならず全国を揺さぶるなど、埋蔵文化財の根幹に関わる様々な問題が表面化してきました。また今年度からは地方分権が本格的に始動し、地方のあり方がますます重要になってくるものと思われれます。このような中で新世紀を迎え、今後の調査・研究のあり方が今大きく問われております。

私どもは、古代史上で一時期を画する都城「長岡京」の調査を進める一方、地域の文化史を解明し、市民の方々に最新の情報をわかりやすくお伝えすることで、長岡京市の文化的発展に寄与したいと頑張っております。

ここに報告しますのは、昨年井ノ内朝日寺で実施しました調査に関するものです。調査では長岡京の遺構を始め、縄文時代から中世に至るさまざまな遺構・遺物が発見されました。主な成果としては、長岡京の右京三条四坊十六町という都の西端での宅地確認と廃都後の様相、井ノ内遺跡の縄文時代・古墳時代の様相など、多くの成果があげられております。

これらの成果は、地域の歴史を解明する重要な資料であるばかりでなく、市民の皆さんの大切な文化遺産であり、21世紀に羽ばたく子供達が郷土を理解する貴重な学習教材でもあります。この報告書の刊行を第一歩として、今後の更なる研究と活用が私どもの重要な使命であると心得ます。

最後になりましたが、現地調査から整理・報告作業に至るまで、ご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年 6月

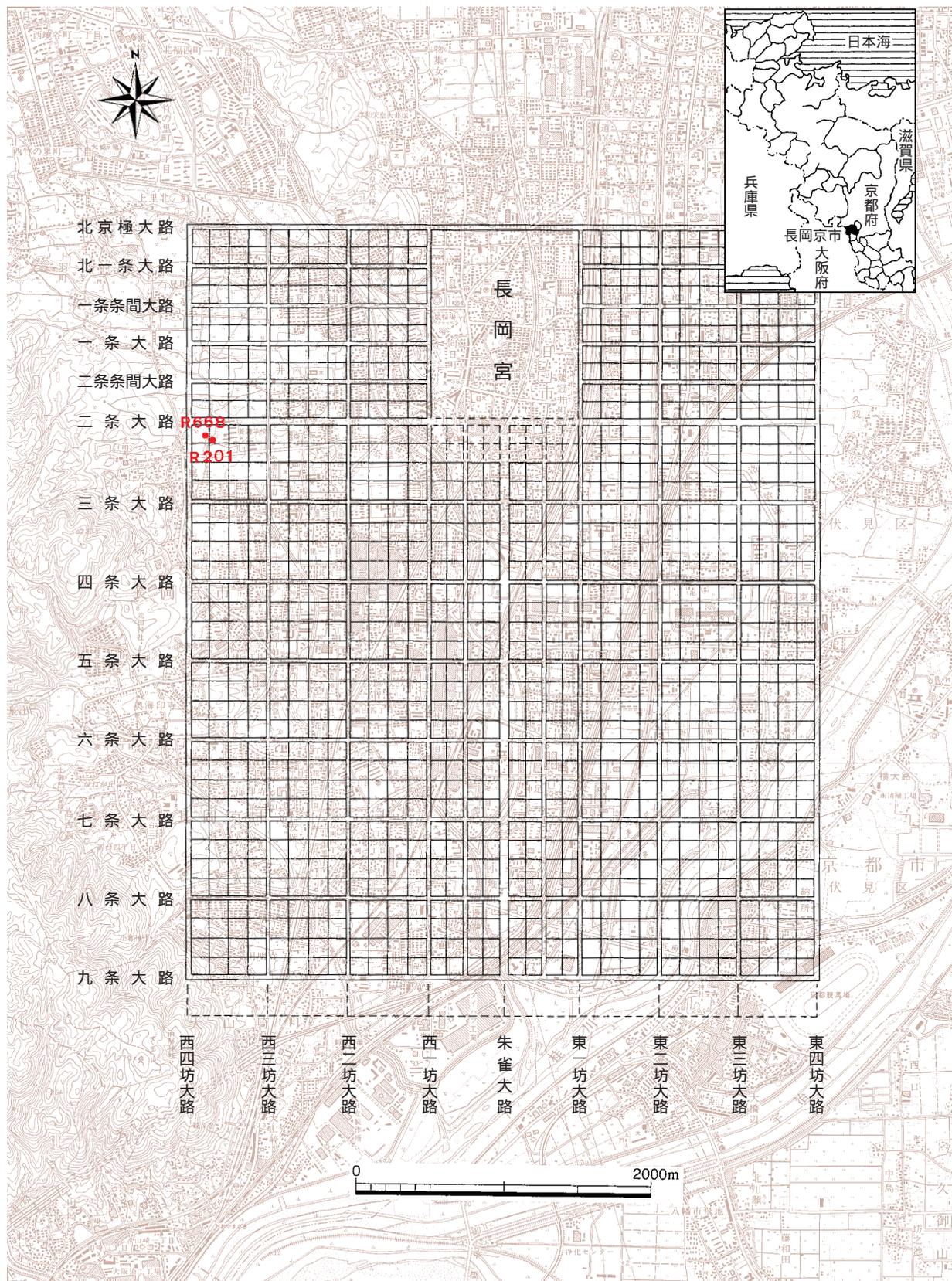
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦 田 富 男

凡 例

- 1．本書は、2000年3月21日から5月29日まで長岡京市井ノ内朝日寺27・2他において実施した、長岡京跡右京第668次調査（7ANGAR・6地区）の発掘調査報告書である。
- 2．調査は施設増築に伴う埋蔵文化財発掘調査で、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが調査を受託し、同センター調査係長 小田桐淳が担当した。
- 3．調査の対象となった遺跡は、長岡京跡右京三条四坊十六町と井ノ内遺跡である。
- 4．長岡京跡の調査次数は、調査機関に関わりなく、右京域での調査次数を通算したものである。また調査地区名は、前半が奈良国立文化財研究所の分類表示で、後半は高橋美久二「長岡京跡昭和51年度発掘調査概要」『京都府概報』（1977年）の旧字名による地区割りであり、枝数字は同一地区内での調査の通番である。
- 5．本書で使用した長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従い、従来の条坊名を二町分北にずらした新条坊名を記した。また地形分類については、基本的に「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によっている。
- 6．本書に記した遺構名は、遺構記号＋調査次数＋通番が正式であるが、挿図中などでは遺構記号＋通番で略記し、調査次数を省略している。また位置図等の調査地点表記は、「右京第次調査地」であるべきところを「R」と略記している。
- 7．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
- 8．遺構写真は小田桐が撮影した。遺物写真については西大寺フォト・杉本和樹氏に撮影を依頼し、一部については囑託調査員（現・桜井市教育委員会）小畑佳子が撮影した。
- 9．本書の執筆および編集は小田桐が行った。

本書表紙のカットは長岡京期の壺Lと壺M



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40,000)

本文目次

| | |
|-------------------|----|
| 序文 | i |
| 凡例 | ii |
| 1 はじめに | 1 |
| 2 調査経過 | 2 |
| 3 検出遺構 | 4 |
| 4 出土遺物 | 8 |
| 5 付編 右京第201次調査の概要 | 27 |
| (1) 調査の概要 | 27 |
| (2) 出土遺物 | 31 |
| 6 まとめ | 32 |
| (1) 縄文時代・井ノ内遺跡の様相 | 32 |
| (2) 長岡京期の様相 | 34 |
| (3) 長岡京期前後の様相 | 35 |

図版目次

巻頭図版 1 調査地周辺の航空写真（南から）

巻頭図版 2 長岡京期の土器

| | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 図版 1 (1) 調査トレンチ 1 遠景（東から） | (2) 調査トレンチ 2 遠景（東から） |
| 図版 2 (1) 調査トレンチ 1 全景（北から） | (2) 試掘トレンチ西部（東から） |
| 図版 3 (1) 調査トレンチ 1 南壁の土層（北から） | (2) 調査トレンチ 1 西壁の土層（東から） |
| 図版 4 (1) 調査トレンチ 2 西壁の土層（東から） | (2) 第 2 層と溝 S D 66809 埋土（東から） |
| 図版 5 (1) 溝 S D 66809・溝 S D 66808（東から） | (2) 溝 S D 66809 断面（東から） |
| | (3) 溝 S D 66808 断面（東から） |
| 図版 6 (1) 井戸 S E 66801 断面（南から） | (2) 井戸 S E 66801（西から） |
| 図版 7 (1) 井戸 S E 66801 上層断面（南から） | (2) 3 層土器出土状況（東から） |
| | (3) 井戸 S E 66801・井戸側（西から） |
| | (4) 土坑 S K 66804（東から） |
| | (5) 土坑 S K 66805（南東から） |
| | (6) 竪穴住居 S H 66810（北西から） |
| | (7) S H 66810・かまど部（北東から） |

- 図版 8 包含層出土縄文土器
- 図版 9 (1) 土器棺墓 S X 66806出土遺物 (2) 包含層出土石器
(3) 溝 S D 66808出土遺物 (4) 溝 S D 66809出土遺物 - 1
- 図版10 (1) 溝 S D 66809出土遺物 - 2 (2) 井戸 S E 66801下層出土遺物 - 1
- 図版11 井戸 S E 66801下層出土遺物 - 2
- 図版12 井戸 S E 66801下層出土遺物 - 3
- 図版13 井戸 S E 66801上層出土遺物 - 1
- 図版14 (1) 井戸 S E 66801上層出土遺物 - 2 (2) 包含層出土遺物 - 1
- 図版15 包含層出土遺物 - 2
- 図版16 (1) 右京第201次調査区全景（南から） (2) 右京第201次調査区東壁断面（西から）
- 図版17 (1) 井戸 S E 20132（南から） (2) 溝 S D 20130断面（南東から）
(3) 下層自然流路断面（北から） (4) 下層自然流路（北から）

挿 図 目 次

| | | |
|-------|-----------------------------|-----|
| 第 1 図 | 長岡京と調査地の位置 (1/40,000) | iii |
| 第 2 図 | 発掘調査地位置図 (1/5,000) | 1 |
| 第 3 図 | 調査風景 | 2 |
| 第 4 図 | 調査区等高線図 (1/400) | 2 |
| 第 5 図 | トレンチ南壁断面図 (1/200) | 3 |
| 第 6 図 | 検出遺構図 (1/400) | 3 |
| 第 7 図 | 溝 S D 66808・09平断面図 (1/100) | 4 |
| 第 8 図 | 井戸 S E 66801平断面図 (1/80) | 4 |
| 第 9 図 | 土坑 S K 66802・04平断面図 (1/40) | 5 |
| 第10図 | 土坑 S K 66805平断面図 (1/40) | 5 |
| 第11図 | 竪穴住居 S H 66810平断面図 (1/80) | 6 |
| 第12図 | S H 66810かまど部平断面図 (1/40) | 6 |
| 第13図 | 土器棺墓 S X 66806平断面図 (1/10) | 7 |
| 第14図 | 土坑 S K 66812平断面図 (1/40) | 7 |
| 第15図 | 土坑 S K 66817平断面図 (1/100) | 7 |
| 第16図 | S X 66806出土土器棺実測図 (1/4) | 8 |
| 第17図 | 遺構・包含層出土縄文土器実測図 (1/4) | 9 |
| 第18図 | 竪穴住居 S H 66810出土遺物実測図 (1/4) | 10 |

| | | |
|------|--|----|
| 第19図 | 土坑 S K 66804・S K 66805出土遺物実測図 (1/4)..... | 10 |
| 第20図 | 溝 S D 66808出土遺物実測図 (1/4)..... | 11 |
| 第21図 | 溝 S D 66809出土遺物実測図 - 1 (1/4)..... | 12 |
| 第22図 | 溝 S D 66809出土遺物実測図 - 2 (1/4)..... | 13 |
| 第23図 | 溝 S D 66809出土遺物実測図 - 3 (1/3)..... | 14 |
| 第24図 | 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 1 (1/2・1/4)..... | 16 |
| 第25図 | 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 2 (1/3・1/4)..... | 17 |
| 第26図 | 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 3 (1/1)..... | 18 |
| 第27図 | 井戸 S E 66801上層出土遺物実測図 - 1 (1/4)..... | 18 |
| 第28図 | 井戸 S E 66801上層出土遺物実測図 - 2 (1/4)..... | 19 |
| 第29図 | 井戸 S E 66801上層出土遺物実測図 - 3 (1/4)..... | 20 |
| 第30図 | 包含層出土遺物実測図 - 1 (1/4)..... | 22 |
| 第31図 | 包含層出土遺物実測図 - 2 (1/4)..... | 23 |
| 第32図 | 包含層出土遺物実測図 - 3 (1/4)..... | 24 |
| 第33図 | 右京第201次調査検出遺構図 (1/300)..... | 26 |
| 第34図 | 溝 S D 20130断面図 (1/40)..... | 26 |
| 第35図 | トレンチ西壁断面図 (1/150)..... | 27 |
| 第36図 | 井戸 S E 20132平断面図 (1/40)..... | 27 |
| 第37図 | 包含層出土縄文土器実測図 (1/4)..... | 27 |
| 第38図 | 包含層出土石器実測図 (1/2・1/3・1/4)..... | 28 |
| 第39図 | 包含層出土土器実測図 (1/4)..... | 29 |
| 第40図 | 溝 S D 20130・包含層出土土器実測図 (1/4・1/8)..... | 30 |
| 第41図 | 井ノ内遺跡周辺の縄文時代確認地点 (1/5,000)..... | 33 |
| 第42図 | 調査地周辺の祭坊 (1/5,000)..... | 34 |

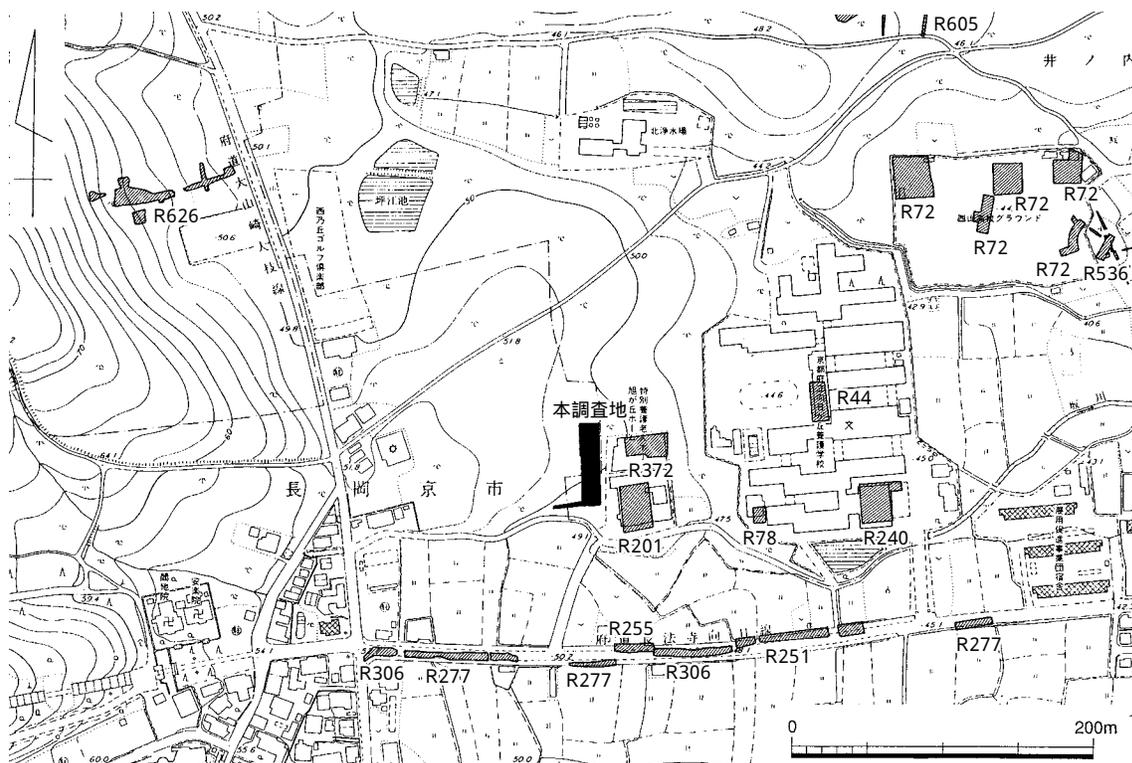
1 はじめに

遺跡の環境と周辺の状況

調査地は、浄土宗西山派総本山光明寺から東へ約300m程行ったところの竹藪にあたり、地形分類では段丘を覆う扇状地に立地している。地表面の標高は敷地西端では52m、東端は50mと西から東へ傾斜する地形となっている。

当地は長岡京跡右京三条四坊十六町にあたるとともに、井ノ内遺跡にも含まれるところである。今回の調査地の東隣りでは、昭和60年度に右京第201次調査^(注1)が行われており、古墳時代の溝や中世の井戸などが検出されるとともに、縄文時代から中世に至る各時代の遺物が大量に出土している。なおこの時の調査で、縄文時代の遺物が西方からの土石流堆積に包含されているとの判断から、縄文時代遺物散布地として「朝日寺遺跡」を設定し、教育委員会発行の遺跡地図にも記載されていた。しかし今回の調査で遺構が検出されたことによって、当地で出土する縄文時代遺物は井ノ内遺跡の縄文時代集落に伴うものであるという位置付けが確定した。本報告をもって訂正し、今後既報告分についても修正していきたい。

長岡京期の遺構としては、調査地の東190m、右京三条四坊八町で行った右京第240次調査⁽²⁾で縦板組隅柱横棧留め井戸が検出され、緑釉火舎が出土しているのを始め、調査地の南100mを東西に走る府道長法寺向日線拡幅時の調査（右京第277次・306次調査⁽³⁾・⁽⁴⁾）でも掘立柱建物が検出されている。ここは右京三条四坊十町にあたる所であり、いずれの調査も当調査地の東に位置する町であるが、これまでのところ、長岡京域では最も西での生活遺構確認となっている。



第2図 発掘調査地位置図 (1/5,000)

2 調査経過

調査は当初まず、2000年3月21日から24日まで、堆積層の状況と遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を実施した。試掘調査は敷地の南辺と東辺に逆「L」字状に線掘りを行った。この結果、敷地南辺トレンチのうち、西半分では地山層の上は全て藪土であるのに対し、東半分では遺物包含層が全面にわたって残存している状況

が判明した。さらに敷地東辺トレンチでは遺物包含層から多くの長岡京期を中心とする土器が出土し、中に緑釉陶器の火舎なども含まれることが明らかとなった。

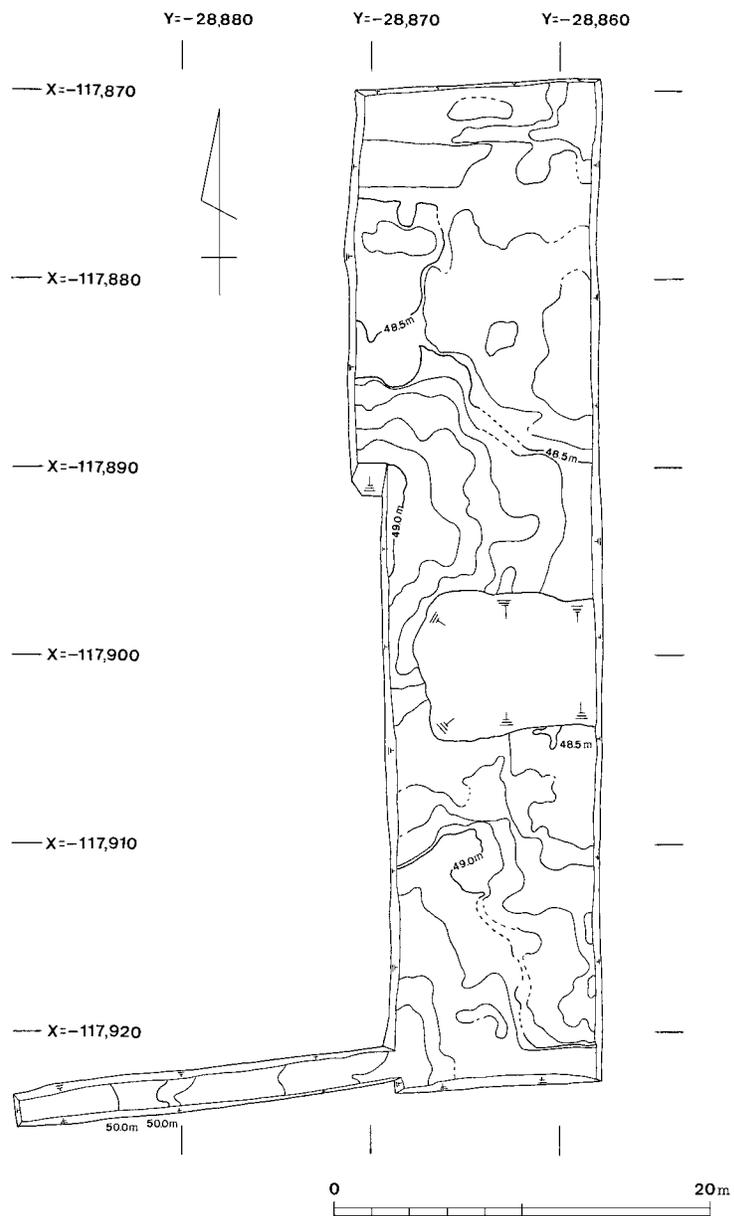
このような周辺調査の状況と試掘調査の結果を踏まえ、敷地内の竹の伐採が終わるのを待って発掘調査を実施した。発掘調査は4月5日から5月29日までである。

発掘調査は当初、試掘トレンチに沿って東西13m、南北52.8mのトレンチを設定したが、土置き場などの関係上、二度に分けて調査せざるを得なくなり、若干の変更を余儀なくされた。第4図及び第6図はこの二度に分けて実施した調査を合わせたものである。なお、最終的な調査総面積は682m²（試掘含む）となった。

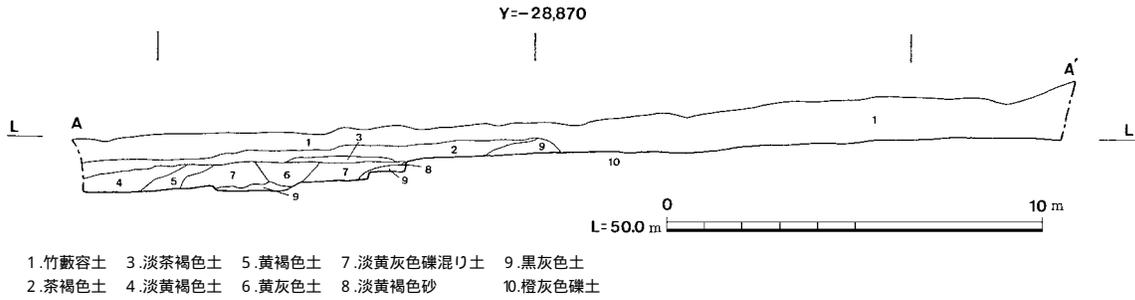
調査地内の層序は、全体的に



第3図 調査風景



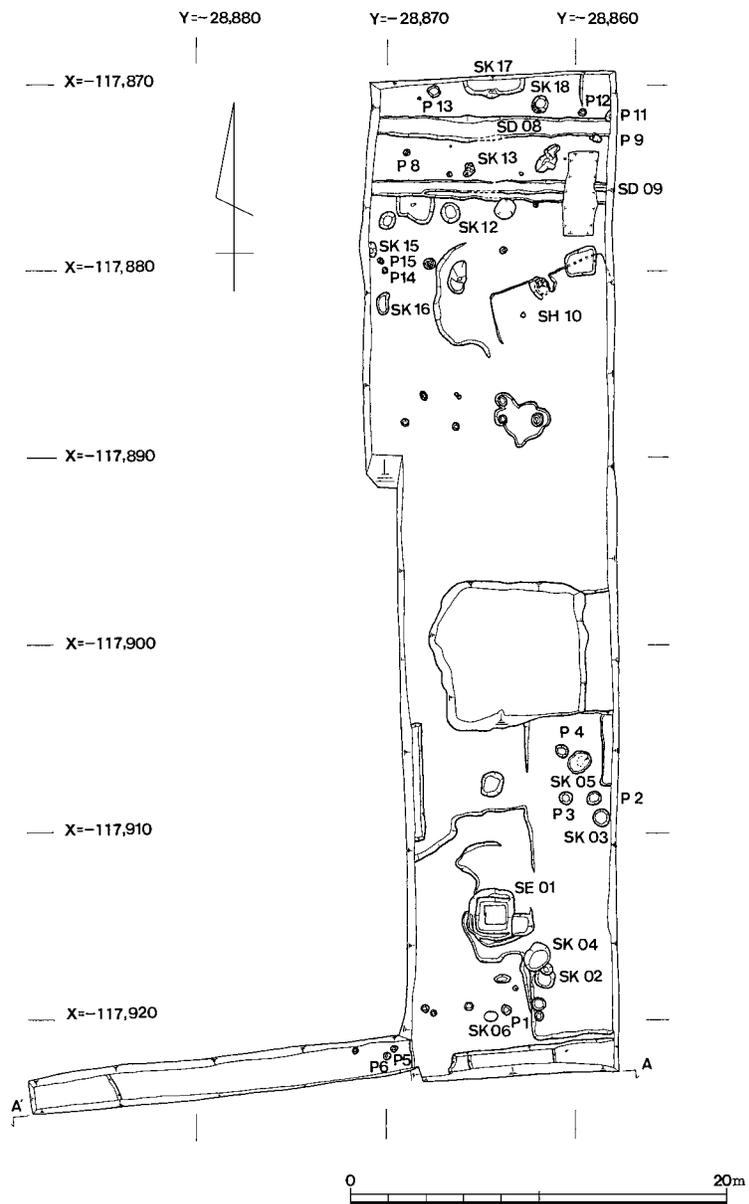
第4図 調査区等高線図(1/400)



第5図 トレンチ南壁断面図(1/200)

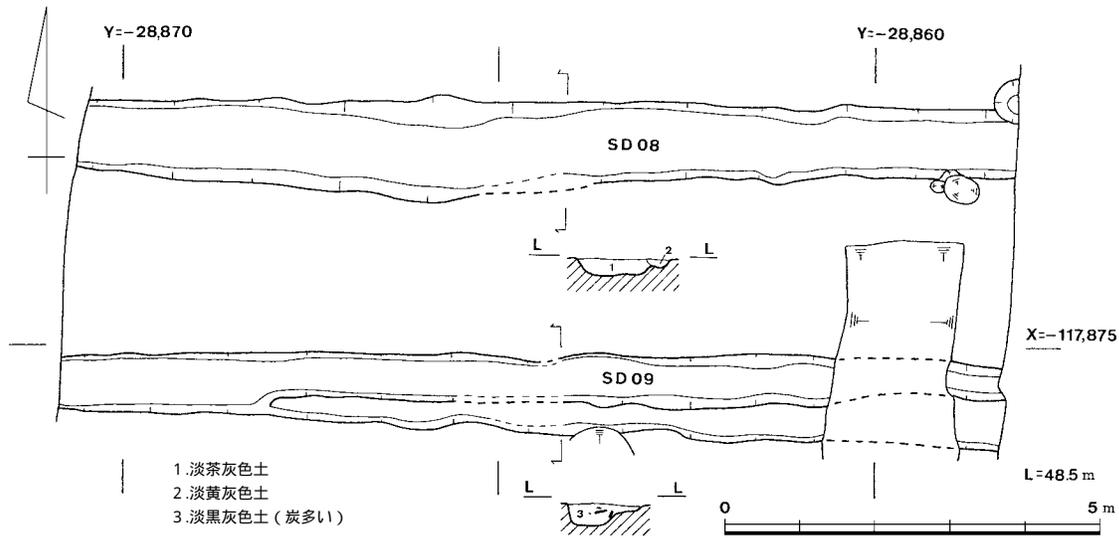
藪土が1 m前後の深さで堆積し、基本的には0.3~0.5mの厚さの茶褐色土(第1遺物取り上げ層、以下第1層)と、地山層が落ち込むところに堆積している暗茶褐色土(第2遺物取り上げ層、以下第2層)の二層の遺物包含層が認められる。このうち第1層は非常に締まりのない、藪土のような堆積で、一部に焼土のブロックや、地山層のような黄灰色粘質土の部分に間に挟んでいる。遺物は中世から縄文時代までの土器片を包含しており、さらに細分される可能性もあるが、中世遺物と古墳時代遺物が混在する状況から、後世に攪拌された層である可能性が高い。第2層は比較的締まった堆積で、長岡京期の遺構が切り込む面でもある。ほとんど縄文時代遺物のみ包含しているが、トレンチ北端部では、古墳時代遺物も出土しており、古墳時代以前の堆積層としておきたい。

地山層の状況は、第5図は調査区南壁の断面図であるが、西半分は藪土の下はほぼ平坦に橙灰色礫土の地山層が堆積しているのに対し、東半分では橙灰色礫土層が落ち込んでいき、その上に断面図4~10の地山層が斜めに堆積している。遺構は第2層上面ないし地山面で確認され



第6図 検出遺構図(1/400)

4 検出遺構



第7図 溝S D 66808・09平断面図(1/100)

ているが、検出された遺構とその上層にあたる包含層出土遺物の接合状況などから、第1層上面ないしはその途中から切り込む遺構もあると考えられる。なお調査区を中心国土座標はX = -117 896、Y = -28 864である。

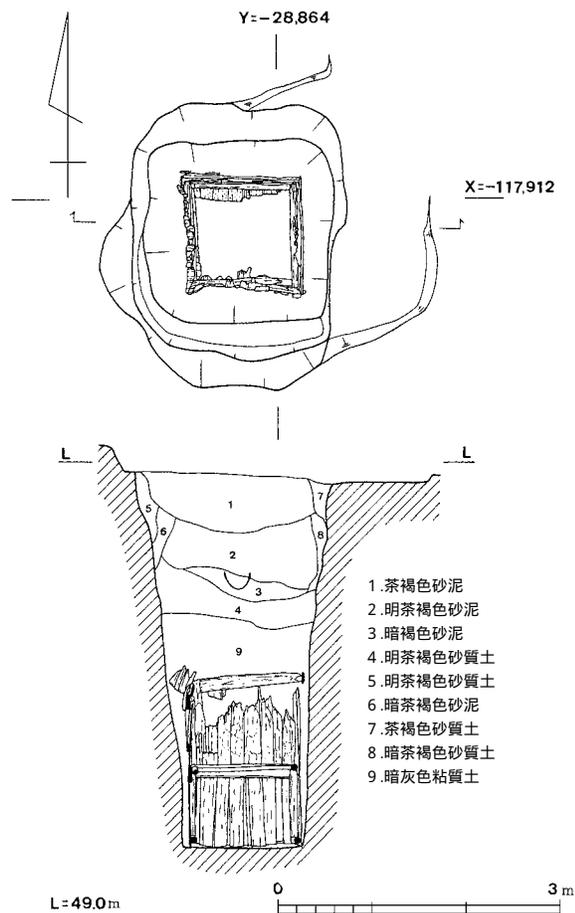
3 検出遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、長岡京期の東西溝2条、縦板組横棧留め井戸(二段構築)1基、古墳時代後期の竪穴住居1軒、土坑3基、縄文時代晩期の土器棺墓1基、後期の土坑、ピットなどである。以下、時代の新しい順に概要を記す。

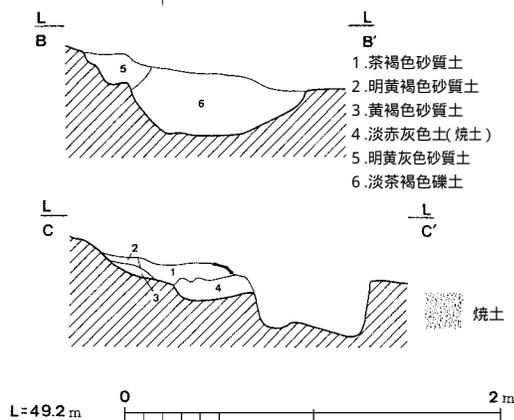
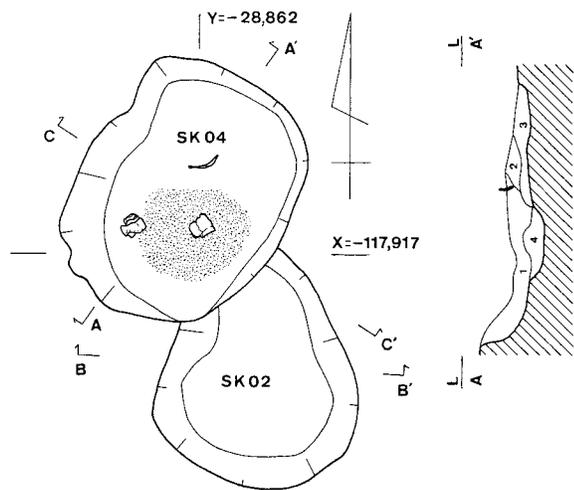
中世の遺構 瓦器片の出土によって中世段階に位置づけられる遺構はP 1、P 5、P 6、P 9、P 11等である。いずれも建物や柵列等へのまとまりは認められない。

長岡京期の遺構 溝S D 66808は、幅0.9~1.3m、深さ0.1~0.2mの東西溝で、埋土は淡茶灰色土の単一層で、炭を多く含んでいる。溝心の座標はX = -117 872.3である。溝底は、地形に沿って西から東へ傾斜している。

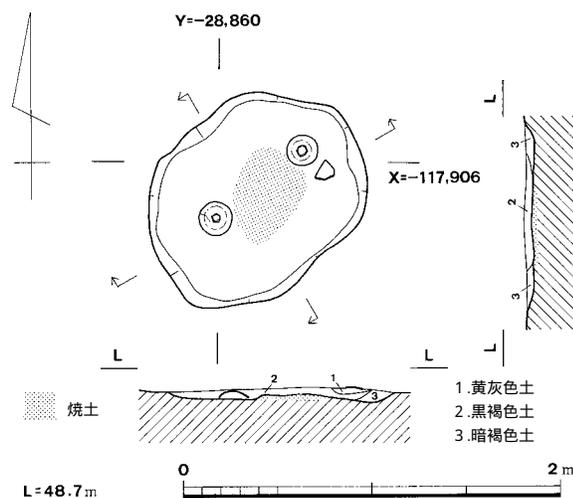
溝S D 66809はS D 66808の南、2~2.5m離れて並行する東西溝である。溝幅は0.8~1.1mで南肩部に0.4~0.5mのテラスをもって二段に



第8図 井戸S E 66801平断面図(1/80)



第9図 土坑S K 66802・04断面図(1/40)



第10図 土坑S K 66805断面図(1/40)

落ちる。このテラスはトレンチ西端部では消滅している。深さは0.1~0.3m、テラス部では0.1~0.15mである。溝底はS D08同様西から東へ傾斜するが、トレンチ中央部付近がもっとも深くなっている。埋土は淡黒灰色土の単一層で、炭を多く含んでいる。溝心の座標はX = -117 875.6である。S D66809からは、完形品を含む多くの遺物が出土している。これらの遺物

は、S D66808と接合するものも複数含まれることから、S D66809とS D66808は同時期に埋没したものと考えられる。

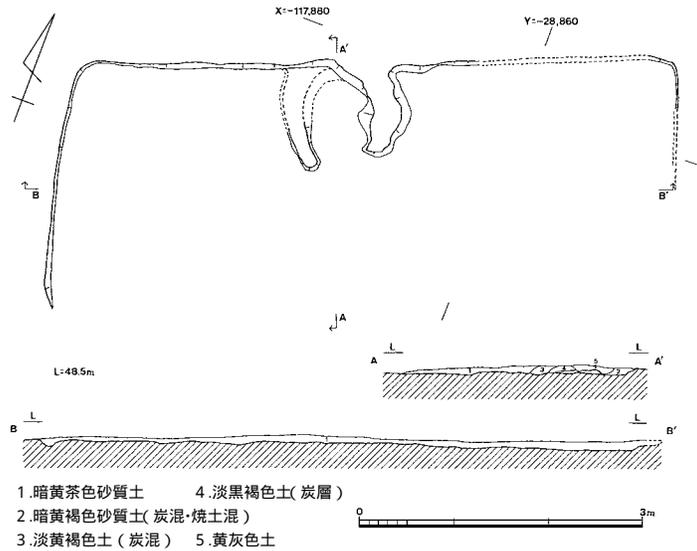
井戸S E 66801 掘形は1辺2m四方で、深さは約4mを測る。井戸側は縦板組横棧留めで、上下二段に組み上げている。下段部は1辺1.15m四方で、1.8mにわたってほぼ完全に残存していた。上段部は、上段の最下部に設置された横棧と縦板の一部が残存しており、その規模は1辺1.3mを測る。掘形と井戸側との隙間は非常に狭く、下段部では縦板材と地山との隙間は10cm程しかなかった。湧水層は海拔47.5mより下に堆積する砂礫層で、現在でも湧水している。

埋土の状況は、1~3層までの層には緑釉陶器など平安時代の遺物が多く含まれている。特に3層からは集中して投棄されたような状況で土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器などが出土している。一方4層以下はしばらく遺物の量は減少するが、時期的には長岡京期に限られるようになる。9層以下は湧水により分層できなかったが、底近くなって完形品の須恵器壺Lや平瓶、曲物などの木製品が多く出土した。

このような状況から、この井戸は井戸廃絶時に9層ないし4層まで一気に埋められ、しばらく窪みとして存在した後、9世紀中頃から10世紀にかけて最終的に埋められたものと考えられる。

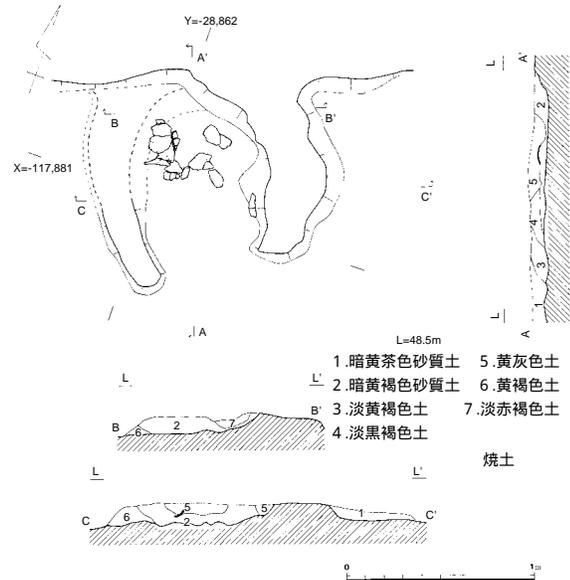
古墳時代の遺構 地山面が東へ低く落ち込む斜面で古墳時代の土坑が3基検出された。

土坑 S K 66804は長辺1.4m、短辺1.1mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは0.15m程であるが、底面南寄りの径50cm程の範囲が赤く焼き締まっていた。埋土から土師器甑片が十数片出土していることなどから、炉跡としての機能が考えられる。しかし地山の傾斜面に掘られていることと、出土遺物から古墳時代後期と考えられることなどから、竪穴住居に伴う炉とは考えにくく、屋外炉であると考えられる。



第11図 竪穴住居 S H 66810 平断面図 (1/80)

土坑 S K 66802は東西1.1m、南北1.3mの土坑で、深さは0.3m程ある。埋土は、当初5層(明黄灰色砂質土)が S K 66804にかぶって堆積していたため、S K 66804より新しい土坑と考えていたが、後に5層は斜面堆積層であり、土坑の付近だけ若干深くなっていたものと判明した。そのため S K 66802の埋土は6層(淡茶褐色礫土)の単一層であり、S K 66804に切られていることがわかった。遺物は小片が若干出土したのみであるため、明確な時期はわからないが、須恵器を含むことと S K 66804より古いことから、古墳時代後期の範疇でおさえられる。

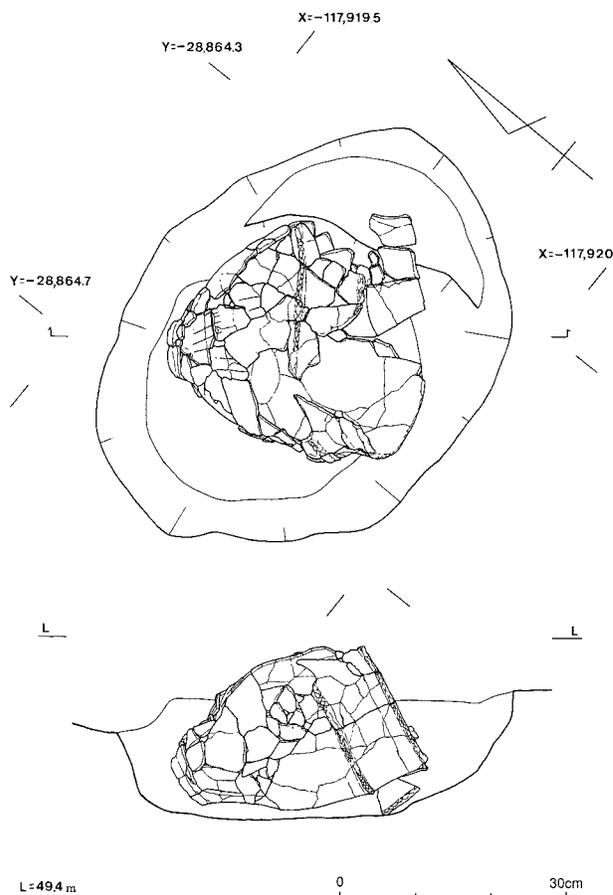


第12図 S H 66810かまど部平断面図 (1/40)

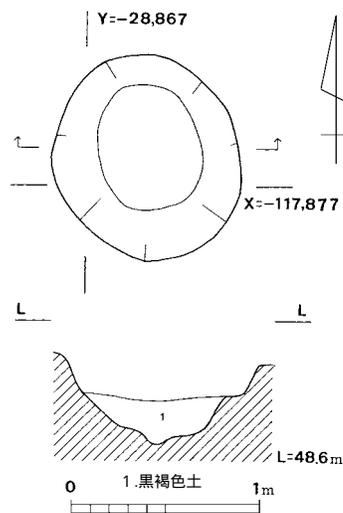
土坑 S K 66805は長辺1.3m、短辺1mの楕円形ぎみの平面で、深さは5cmほどと浅いが、これは第1層掘り下げ途中で既に異なる土が確認されていたが、第1層の底面まで下げないと輪郭が確認できなかったためである。土坑の底面中央部には焼成を受けた面がありこの面の外側に土師器と須恵器の高杯が1個体ずつ伏せて置かれていた。土師器高杯の内部にも焼土が詰まっていた。この土坑も S K 66804同様屋外炉の可能性が考えられ、高杯は支脚としての機能が考えられるが、その使用方法については検討する必要がある。

竪穴住居 S H 66810は1辺6.3m程の方形住居で北西部のみ検出された。住居の方位は西で南に約20度振れており、北西辺中央部にはかまどが設けられている。壁溝は認められず、支柱穴は確認できなかった。

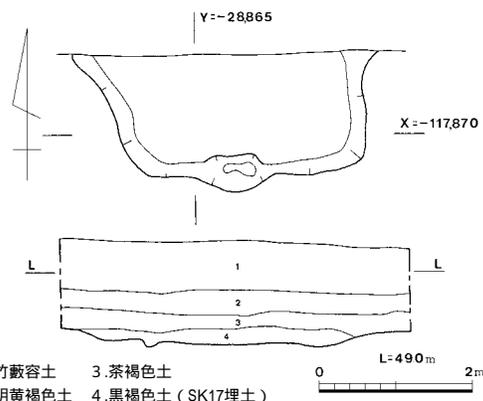
かまどは炊き口幅0.5m、奥行き1m程の規模で、0.1m程の深さで残存していた。炊き口付近



第13図 土器棺墓 S X 66806平断面図 (1/10)



第14図 土坑 S K 66812平断面図 (1/40)



第15図 土坑 S K 66817平断面図 (1/100)

からかまど中央部にかけての底面は赤く焼き締まっており、長胴の土師器甕の破片がまとまって出土している。住居内埋土から出土している須恵器から、時期は6世紀中頃になると考えられる。

縄文時代の遺構 土器棺墓 S X 66806はトレンチ南部で検出された晩期の土器棺墓である。検出された場所は、東へ落ち込む手前の平坦面で、トレンチ内でも高い部分にあたる。標高は49.3m程のところである。

土器棺は深鉢で、長径0.6m、短径0.45mの楕円形の穴の中央部に横たえられていた。蓋に相当する土器などは見あたらない。遺構の切り込み面は第5図7層にあたる。

土坑 S K 66812は長径1.1m、短径1mのほぼ円形の土坑で、掘り鉢状に0.5m落ち込んでいる。埋土は黒褐色土の単一層である。中から後期の土器片が出土している。ほかに S K 66813、S K 66815、S K 66816、P 14、P 15も後期の土器片のみを出土する遺構である。

土坑 S K 66817はトレンチ北端で検出された遺構で、これも後期の土器片を包含する。東西4mで深さは0.2m程である。第2層の下面で検出された。第2層とはよく似た層であり、地形の窪みである可能性も考えられる。

他に P 2 ~ 4 も縄文土器が数点出土している遺構である。埋土も締まりのないものの黒褐色土と第2層によく似た層であった。しかしピットの並びから掘立柱建物になる可能性も考えられる

ものである。規模はいずれも0.6m前後で円形ないし楕円形気味を呈している。深さは0.2~0.3m程で、P2 - P3間が2.5m、P3 - P4間が1.5mを測る。ほぼ正方位で「L」字状に配列している。長岡京期の掘立柱建物になる可能性も考えられる。

4 出土遺物

今回の調査では大量の遺物が出土した。その量はコンテナで38箱以上にわたり、時期幅は縄文時代から中世まで連続しているが、大半は第1層出土のものである。ここでは全ての報告はできないが、遺構出土のものを中心に時代毎に概要を報告する。なお、縄文土器は遺構と包含層を合わせて記述する。

縄文時代出土遺物（第16図・第17図） 縄文時代の遺物は第1層および第2層、土坑などの遺物を含めてコンテナ1箱ほど出土している。土器棺として使用されていた深鉢以外は全て小片ないし細片である。

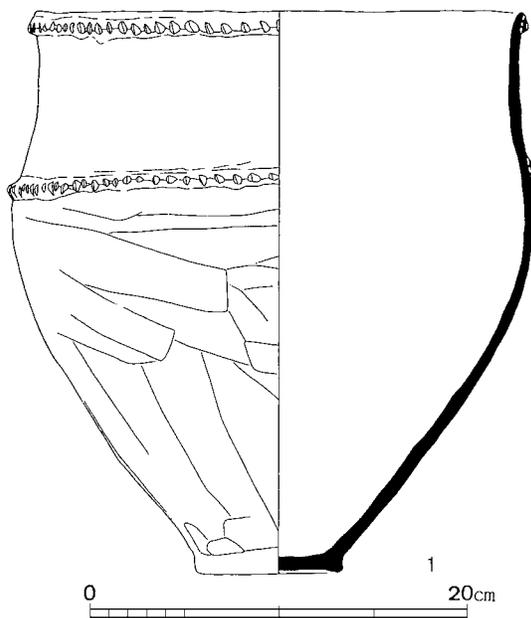
S X 66806の遺物（第16図） 1は土器棺に使用されていた深鉢である。ほぼ完形で出土した。胎土は淡茶褐色を呈し、1~2mmの石英、長石、チャート粒を多く含んでいる。端部は尖らせるように上方につまみ上げ、端部外面と最大径やや上方に刻目突帯を巡らせる。調整は、内面は横方向に丁寧になでられ、外面は下半部を縦方向、最大径付近は横方向に板状工具を用いて削っている。2条の突帯の間はなでられている。外面上半および、内面下半には煤が付着している。

包含層出土遺物（第17図） 6はS X 66806の検出中に出土したもので、S X 66806には伴わないものである。深鉢になるが、突帯は口縁端部やや下方に1条のみ巡らせる。刻目は浅い。明黄茶色を呈し、1mm以下の石英、長石、チャート粒を多く含んでいる。外面には煤が付着している。

これらの土器の時期は晩期後葉に位置づけられる。他に突帯文を有する土器は、第2層より1点出土している。58は明茶色を呈し、角閃石を含んでいる。

2~14はS K 66812から出土したものである。2は無文土器で、端部は内面に若干折り込んで丸く収められる。11も無文であり、段が認められる。3、7は縄文地に沈線が施される磨消縄文である。3の端部は四角く面をもつ。4は波状口縁の波頂部と考えられるもので、波頂部の外面に、円弧状に竹管文が配されている。他は磨耗により定かではないが、磨消縄文とみられる破片である。

15~29はS K 66817から出土したものである。15、19は無文、18、21は条線文、他は磨消縄文の破片である。この土坑からは底部の破片（29）も出土している。17は波状口縁の波頂部である。



第16図 S X 66806出土土器棺実測図（1/4）



第17図 遺構・包含層出土縄文土器実測図(1/4)

30～62は包含層出土のものである。その内、33、40、43～46、48、49、52、53、55、58、59、61が第2層出土で、他は第1層出土である。ほとんどは磨消縄文の破片であるが、40、45は竹管文が施されるものである。また52の沈線の中には一部に刺突文が認められる。39は屈曲部外面に、平坦な面をもつ幅広の隆帯を設け、縄文を施すものである。この破片は、外面茶灰色で断面黒褐色を呈しており、長石、石英粒を多く含む胎土である。60は磨消縄文の破片であるが、器壁が他の土器と比較して薄く、明黄灰色を呈し、石粒をあまり含まない精良な胎土である。土器類にはならず、何らかの土製品の一部になる可能性が考えられる。図示していないが、条痕文も若干認められる。

これら磨消縄文を中心とする土器類は後期の範疇でおさえられるものである。

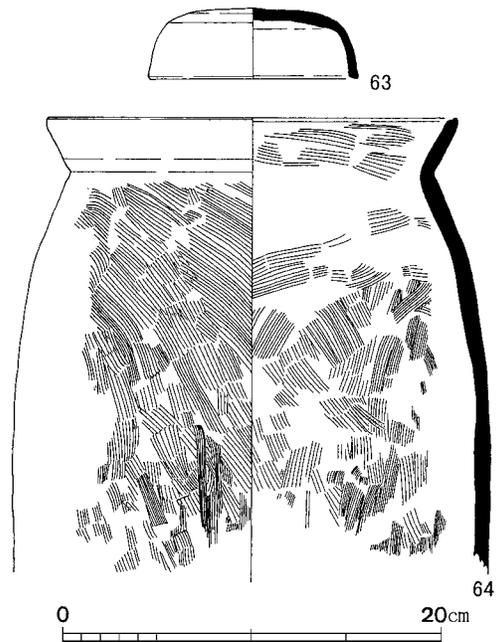
古墳時代出土遺物（第18図・第19図） 古墳時代の遺構としては、S H 66810、S K 66802、S K 66804、S K 66805が検出されている。

S H 66810出土遺物（第18図）

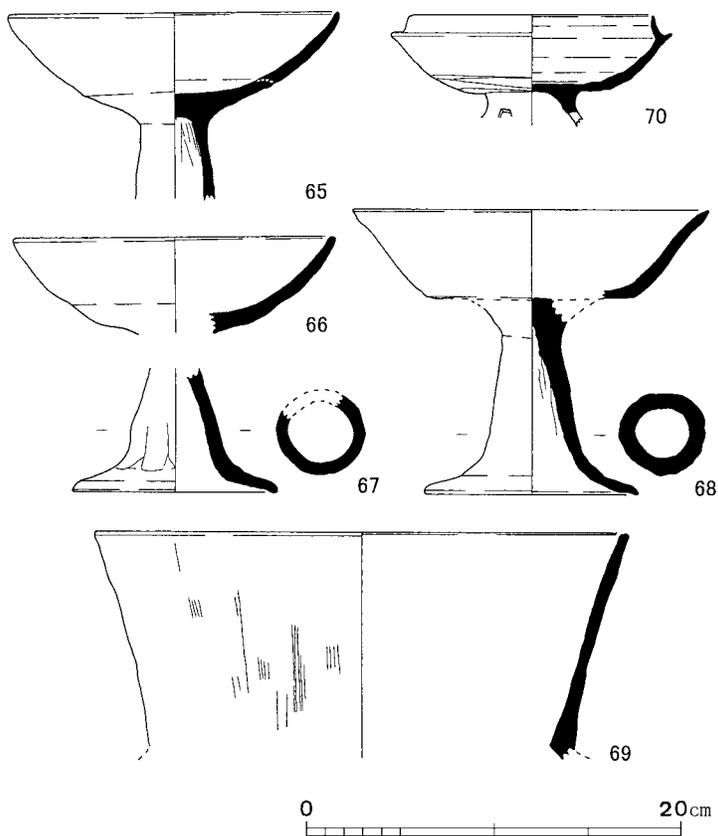
古墳時代後期の竪穴住居で、須恵器蓋（63）と土師器甕（64）が出土している。

63は外面の削りは自然釉によって観察不能であるが、内面中央に同心円の当て具痕を残すものである。表面灰白色、断面はセピア色を呈している。石英、長石粒を若干含む精良な胎土である。短頸壺の蓋になると考えられる。

64はかまど部から出土したもので、明赤灰色を呈する良好な焼きで、胎土には0.5mm程の石英、長石、チャートを多く含んでいる。口縁部は「く」字状に開いた後、若干内湾する。端部は内面に少し窪む面を作る。内外面八ヶ調整される。



第18図 竪穴住居 S H 66810出土遺物実測図（1/4）



第19図 土坑 S K 66804・S K 66805出土遺物実測図（1/4）

S K 66805出土遺物（第19図）

底面に据えられていた高杯は65と70である。

65は淡赤灰色を呈する精良な胎土で、チャート、長石、赤色班粒を含んでいる。外面は炎を受けていたためか、荒れているが、内面はナデの痕跡がよく残っている。

70は有蓋高杯で、脚部には三方に長方形の透かしがあったのが見て取れる。淡青灰色を呈し、外面には自然釉がかかっている。杯部の形態から、陶邑 T K 10型式から M T 85型式頃に該当するものと考えられる。

66は65と同タイプの高杯で、杯部の底面に体部を継ぎ足した痕跡が明瞭に残っている。底部外面が指オサエ痕を残すのに対して、体部外面は綺麗になでられている。

67は脚部である。全体的に薄い造りで、筒部には板状原体で押さえたような面を残す。

S K 66804出土遺物（第19図） 土師器高杯（68）と甗（69）が出土している。68は赤灰色を呈するものであるが、内外面とも傷みが激しく、調整等は不明である。69は淡赤灰色を呈し、68同様傷みが激しいが、わずかに外面のハケが観察できる。また把手を挿入した痕跡を残している。

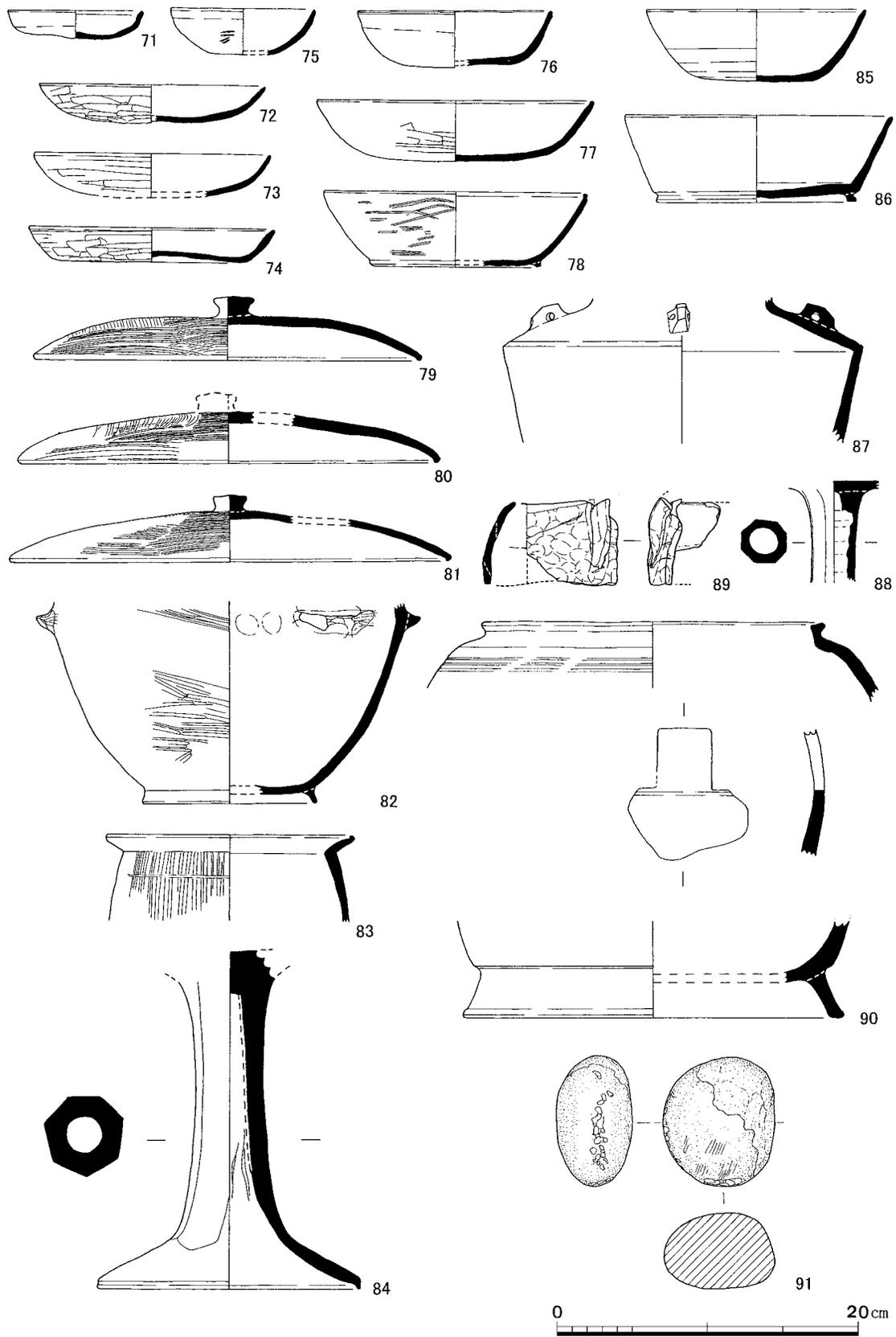
長岡京期出土遺物（第20図～第26図） 長岡京期と考えられる遺構は、S D 66808、S D 66809、S E 66801であるが、溝出土遺物には若干新しい要素も認められ、今後検討を要する。また井戸出土遺物で当該期の資料は下層出土のものである。

S D 66808出土遺物（第20図） S D 66808、S D 66809から出土している土器は、上層の包含層出土遺物と接合する例が多いが、溝のプランを確定した後に出土した資料と接合したものについては、溝出土として掲載している。

S D 66808からは第20図に示した遺物が出土している。このうち79、81～83、87、90はS D 66809とも接合関係のあるものである。

土師器では皿 C（71）、皿 A（72～74）、椀 A（75）、杯 A（76、77）、杯 B（78）、皿 B 蓋（79～81）、高杯（84）、壺 A（82）、甗（83）等が出土している。これらの中で、71は完形品であるが、端部3カ所に煤が付着している。75は明赤灰色の精良な胎土で、体部外面を軽く削った後、粗いミガキを施しているものであるが、直径が9.7cmと小型の部類に属すものである。76は軽いケズリで、成型時の凹凸を若干残す。71、77は明桃灰色の精密な胎土の一群である。73は明赤茶色を呈し、長石の微粒子を多く含む胎土である。78は茶褐色を呈し、外面は底部までケズリ、体部にはミガキを施している。79～81は口径25.7cmから29.4cmあり、皿 B の蓋になると考えられる。82は壺 A になると考えられるもので、明赤灰色を呈する緻密な胎土で、石粒はほとんど含まない。外面は横方向に丁寧にミガキ調整し、最大径付近に小さな把手を有する。83は「く」字の口縁をもち、体部は口径より大きくならないタイプの小型甗である。淡黄灰色を呈し、胎土には金雲母を含んでいる。内面は丁寧になでており、横方向に外面は下から上方向に幅の広いハケが施される。

須恵器では杯 E（85）、杯 B（86）、壺（87）、高杯（88）等が出土した。85は体部の下半分から底部をヘラケズリしている。器壁は薄く均一で丁寧に造りである。精良な胎土で、淡青灰色を



第20図 溝 S D 66808出土遺物実測図 (1/4)

呈し、焼きは若干甘い。86は灰白色を呈する軟質の焼きで、胎土は精良である。このような胎土・焼成の特徴は杯Aの一群に認められるものであるが、今回の調査では、杯Bや皿Aにも複数個体認められる。87は短頸壺になるものと考えられる。面取りし、中央に円形の穴を開けた把手が3カ所確認され、破片の位置関係から四方に復原した。88は8面に面取りされた細い脚部をもつ。杯部は別個につくられ、脚部は杯部との接合部のみ心棒を通した痕跡がある。しかし以下は細い粘土紐を巻き上げて整形している。

90は緑釉陶器の火舎である。釉色は淡緑灰色で、素地は白色できめ細かい胎土である。S D 66809のほぼ全域からS D 66808の東半にかけて十数片の破片が散布していた。他に縄文時代の磨石(81)も出土している。砂岩質の石材である。

S D 66809出土遺物(第21図～第23図) 量的にはS D 66808より多い。特にトレンチ中央部の深くなった部分から大量に出土している。S D 66808で報告した接合資料も、破片の割合では当溝からの方が多く出土している。

土師器では椀A(92～101、112)、杯A(102～105、111)、皿A(106、108、109)、皿C(107)、高杯(113～116)、壺E(110)、ミニチュアカマド(119、120)、カマコ(117、118)などがある。また第30図248の甕も当溝出土の破片と接合したものである。

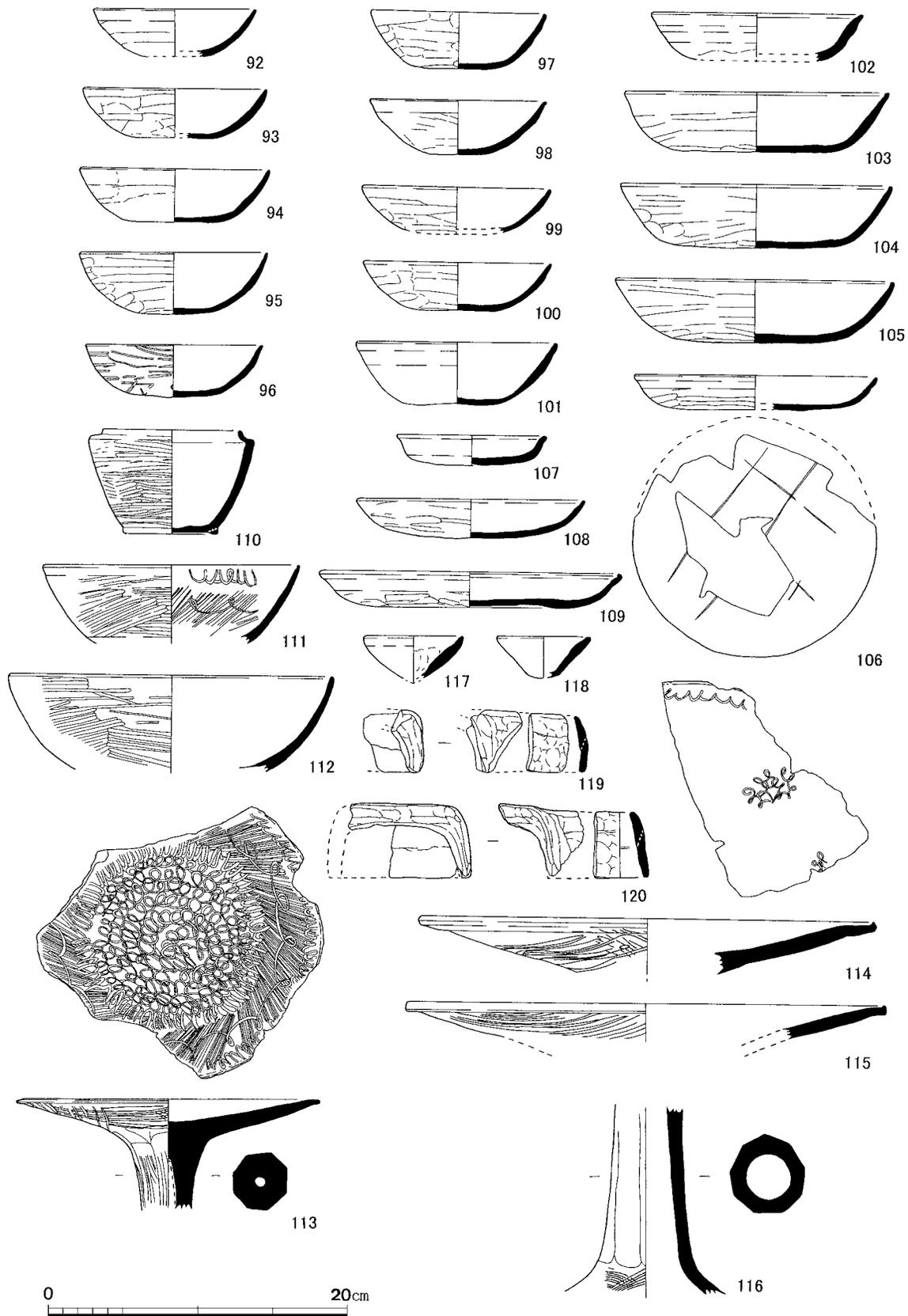
椀Aは、口径が11cmから13.6cmのものが出土しており、ほとんどがc手法で調整される。胎土が明桃灰色を呈す一群としては97、98、100がある。また92、99は淡赤灰色を呈する一群である。112は外面を丁寧に磨き、内面はナデ調整される。石粒を含まない精良な胎土で、表面は赤灰色であるが、断面は明黄灰色を呈している。奈良時代の混入の可能性が考えられる。

杯Aでは、102が外面ナデ調整され、径も小さいなど新しい要素が認められる。他はbないしb'手法で調整される。111は端部を内面に肥厚させるもので、外面は丁寧なミガキ調整、内面には放射状と螺旋状の暗文を施す。赤灰色を呈する精良な胎土である。

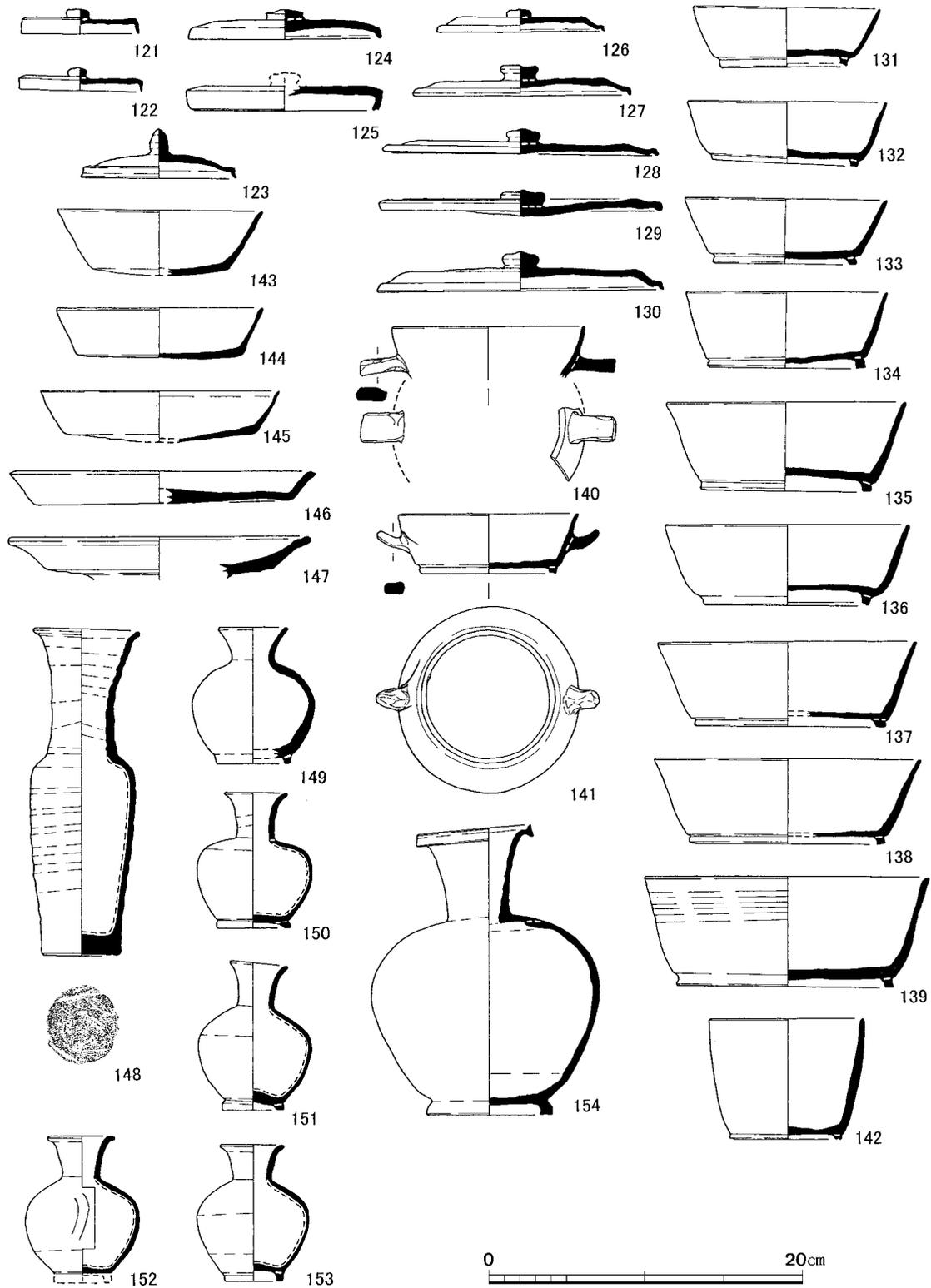
高杯では、113、114はいずれも杯部内面に暗文を施すものである。両者とも杯部外面は削った後、粗めのミガキを施す。113は小型の高杯であるが、内面に放射状、螺旋状の暗文を密に施している。さらに脚部の面取りした部分にまでミガキを施す。脚部の造りは心棒造りである。114は杯部内面の端部付近に螺旋状の暗文、他に黒色土器に見られるような螺旋暗文群を配する。いずれも赤灰色系の精良な胎土である。これらの高杯がどのように位置付けできるかは検討を要する。113の暗文構成は111とも共通しており、一群のものとして認識される可能性がある。

須恵器では壺類蓋(121～125)、杯B蓋(126～130)、杯A(143～145)、杯B(131～139)、把手付き杯(140、141)、皿A(146)、椀B(142)、壺G(148)、壺M(149～153)、壺L(154)等が出土した。

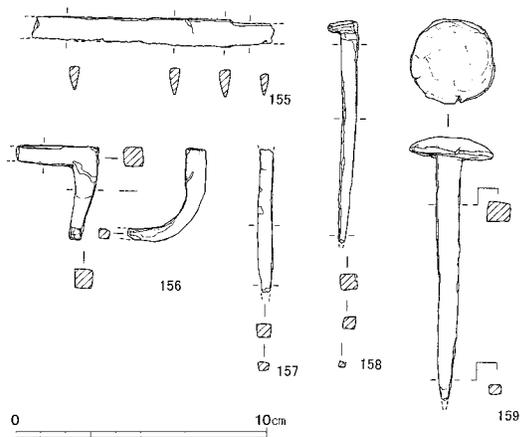
当溝では壺類の蓋が目立つ。121、122は完形に接合した。いずれも上面に自然釉がかかる。123は宝珠形のつまみを有する蓋で、なだらかにカーブする天井部から屈曲して外側に開く口縁をもつ。淡青灰色を呈し、やや焼きが甘い。これらの蓋とセットになる壺は皆無であるが、壺Mは5個体出土している。そのうち150～153は完形品である。



第21図 溝 S D66809出土遺物実測図 - 1 (1/4)



第22図 溝S D66809出土遺物実測図 - 2 (1/4)



第23図 溝S D 66809出土遺物
実測図 - 3 (1/3)

144、146は淡灰白色の焼きが甘い一群である。図示していないが、当溝でもこの一群の杯Bが出土している。

出土例の少ない把手付き杯は2個体出土している。140はヘラケズリによって長方形に成形された把手で、杯Bになると考えられる。杯の体部は若干内湾する。141は完形品である。把手は手づくねによって成形される。147は外面をヘラケズリしており、さらに盛り上がりを見せる。このような外形の様子から高杯になる可能性が考えられるが、蓋になる可能性も残る。

142の椀Bは完形で出土している。高台は体部と比較して小さい。

土器類以外では、鉄製品(155~159)が出土している。155は刀子であるが、小型品がもう1点出土している。157~159は大型の釘で、156は鏃になる可能性が考えられる。また、埋土中からは炭片が大量に出土している。

これらS D 66809出土遺物は、完形品ないし接合して完形近くなる資料が多いのも特徴である。炭の大量出土と合わせて一気に埋められた可能性が考えられよう。また遺物の時期は、須恵器を見る限りでは長岡京期で収まるものであるが、土師器の様相は変化に富んでいる。胎土などから複数の産地の製品が想定されることも合わせて、今後さらに検討を要する。

S E 66801下層出土遺物(第24図~26図) 長岡京期の一括資料として良好なものである。個体数は少ないが、形にまとまるものが多い。また木製品も多く出土している。

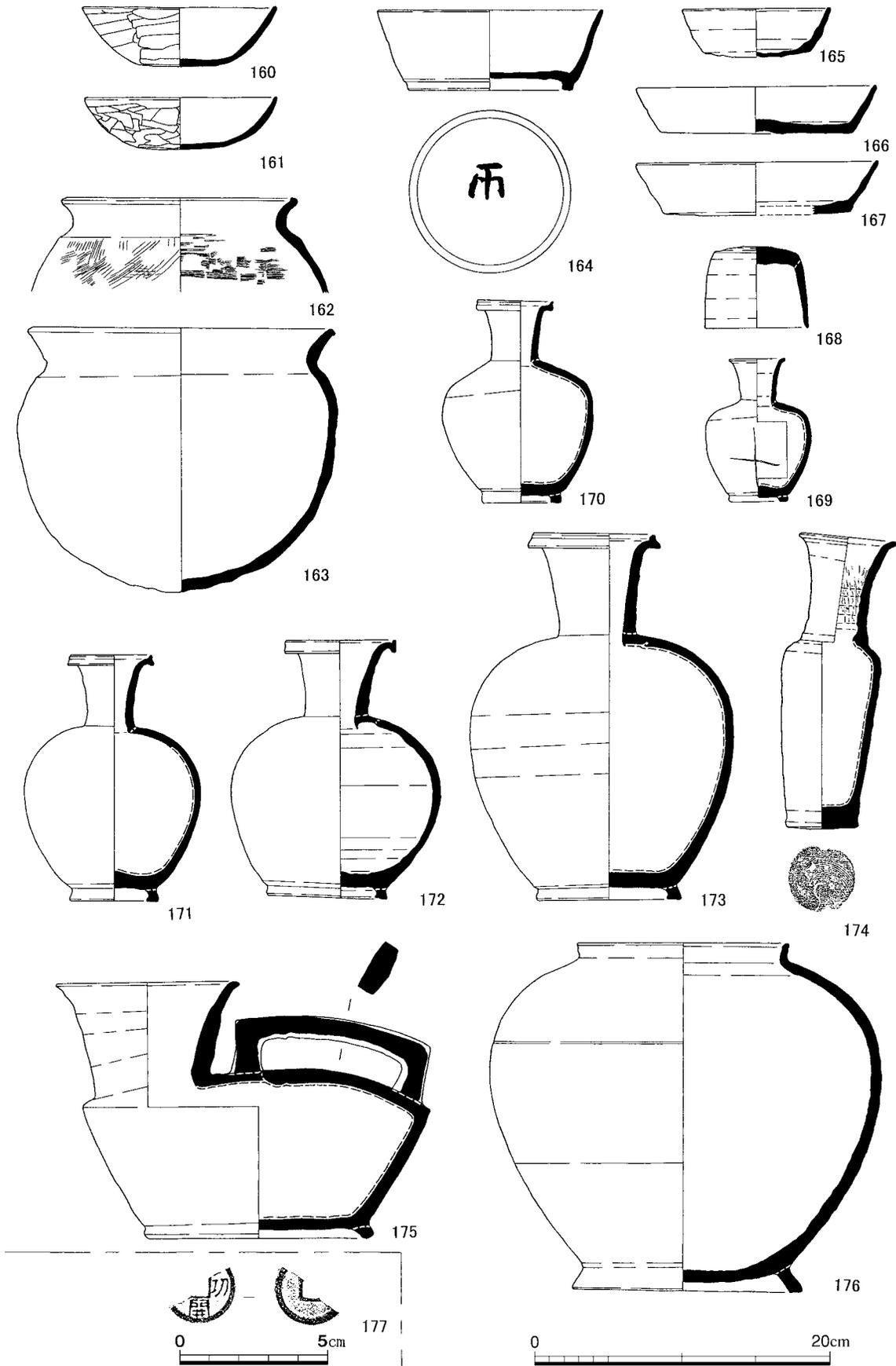
土師器では椀A(160、161)、甕(162、163)、須恵器では墨書杯B(164)、杯A(165~167)、蓋(168)、壺M~L(169~173)、壺G(174)、平瓶(175)、壺A(176)がある。171、173、175は完形品である。他の土器も完形に近いものが多い。当遺構でも壺類が多いのが特徴である。

164の杯B底部外面中央には「市(そう)」の墨書が認められる。168は壺Aになる可能性も考えられるが、底部外面を手持ちで粗く削っており、安定が悪いことや、底部の厚みが体部に比較して厚いことから、壺類の蓋になる可能性を考えた。

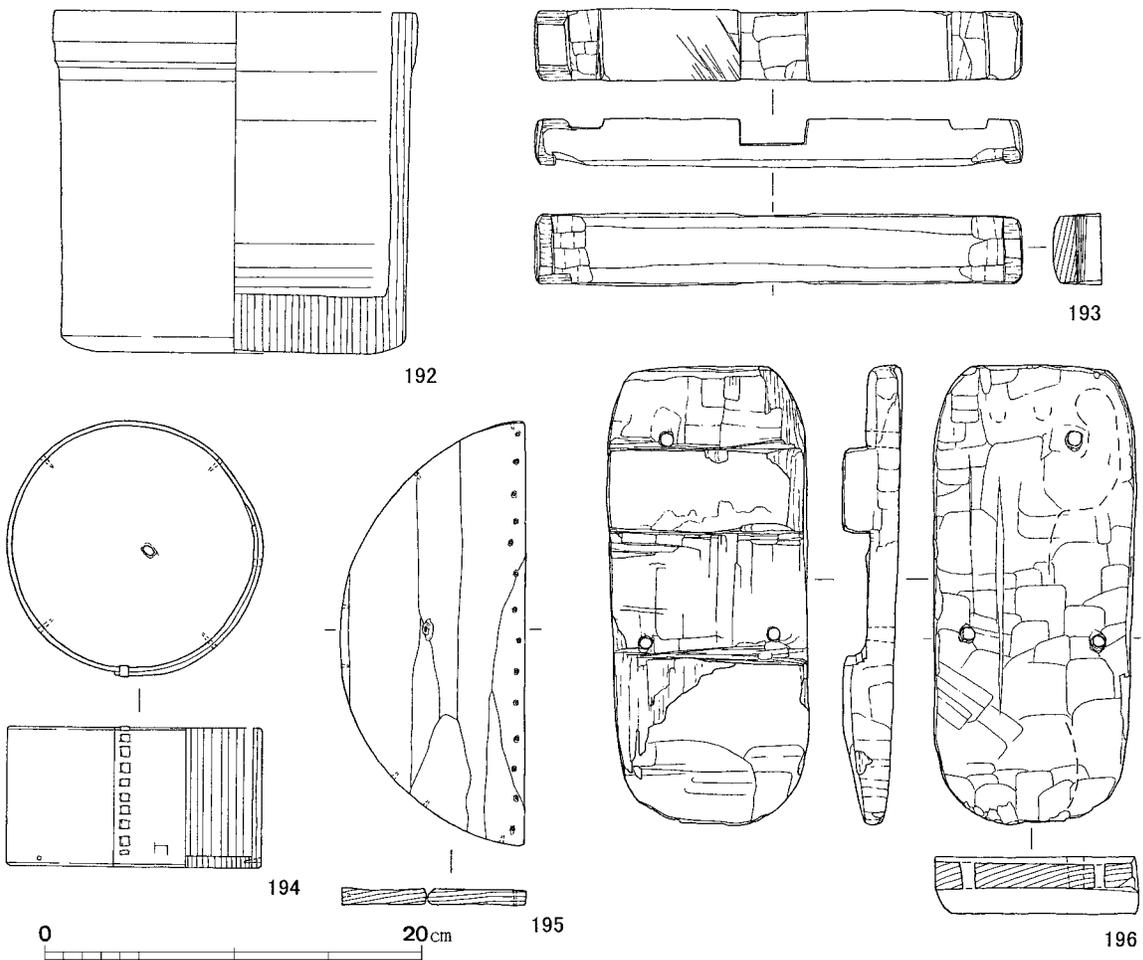
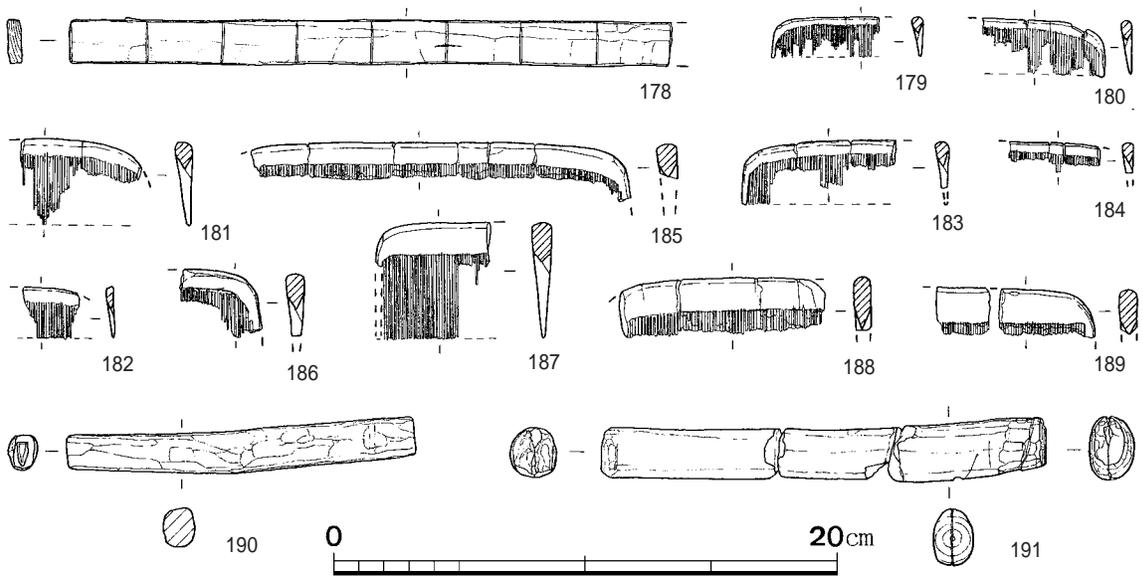
163の甕は、淡赤茶色を呈し、2mm前後の石英、チャートを多く含んでいる。内面は丁寧になるが、外面には凹凸が残る。

木製品では、物指(178)、櫛(179~189)、柄(190、191)、挽物の合子(192)、部材(193)、曲物(194、195)、下駄(196)等が出土した。これらの木製品は、井戸の底近くの埋土から出土したものである。特に最下層の砂質土は全て水洗し、小さな遺物の発見に努めた。

178は幅1.7cm厚さ0.5cmの物指で、ほぼ3.0cm毎に線が刻まれ、長さは24cm。一方が折れているが、生きている端から5目盛目には、横にも線刻がされている。目盛としては7寸分が残存している。



第24図 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 1 (1/2・1/4)



第25図 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 2 (1/3・1/4)

櫛は全長のわかる資料はなかったが、背幅が3mmで幅16~21mmのもの(179、180)と、背幅4~6mmで幅20~34mmのもの(181~184)、背幅7~9mmのもの(185、186)、背幅12~14mmで幅46mmのもの(187~189)など数種類が出土している。

190は刀子の柄、191は片端を縦に半裁し、端部に段差を削りだしている。

194の曲物は完形品であるが、底板のほぼ中央部に穴が穿たれている。195の曲物底板は半分に割れているが、割れた面に沿って穴が穿たれており、補修痕と考えられる。

197は、用途としては陽物であると考えられるが、根の部分に人面が彫刻されたものである。カリの部分の一方が幅4.5mm深さ5mm程にわたって深くえぐられており、この部分に紐をくくり、井戸内に釣り下げた可能性も考えられる。

他に半分に割れた神功開寶(第24図・177)が1点出土している。

平安時代出土遺物(第27~29図) S E 66801の上層・1~3層出土の遺物は、平安時代前期を中心とするものであり、量的にもまとまった資料である。

S E 66801上層出土遺物(第27~29図) 第27図・198は3層から出土しているものであるが、長岡宮式7722A型式軒平瓦である。凸面には横方向の縄目叩きが認められる。

須恵器では椀(199~201、203~206)、小椀(207)、大椀(220)、皿(208~210)、甕(219)がある。緑釉陶器では椀(202)、唾壺(211)が出土している。土師器では皿A(214)、杯A(215)、高杯(212)、甕(216~218)、黒色土器の杯(213)等が出土している。

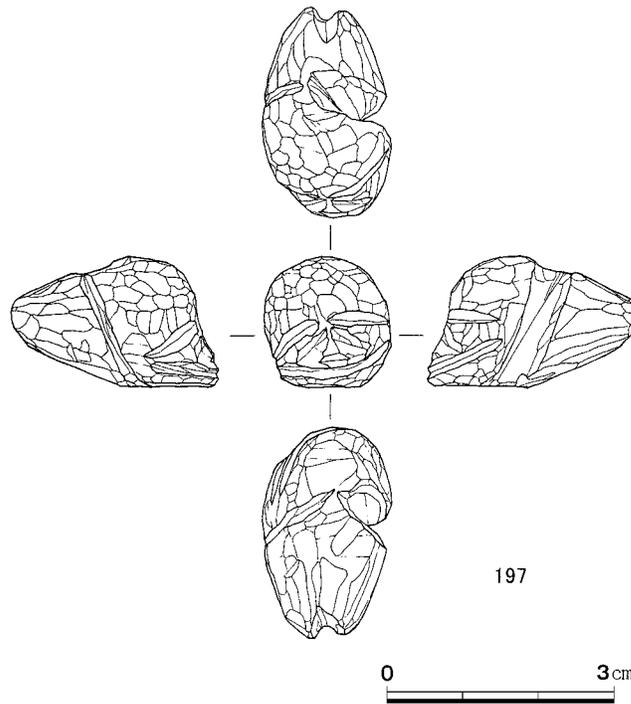
須恵器椀・皿類のうち、201、204、208、210は灰白色の軟質の焼成であり、他は青灰色の堅緻な焼き上がりである。いずれもヘラミガキによって調整され、削り出しの輪高台が多いが、蛇ノ目高台も一定量含まれる。ヘラ記号の認められる個体もあり、200の見込みには図示していないが、「x」記号が認められる。209は内面に自然釉が付着し、焼きひずみのためか、耳皿のように端部が反り返った形態になっている。

207の小椀は類例の少ないものであるが、ロクロ成形後の調整は施されず、底部には糸切り痕を残す。青灰色の堅緻な焼成である。

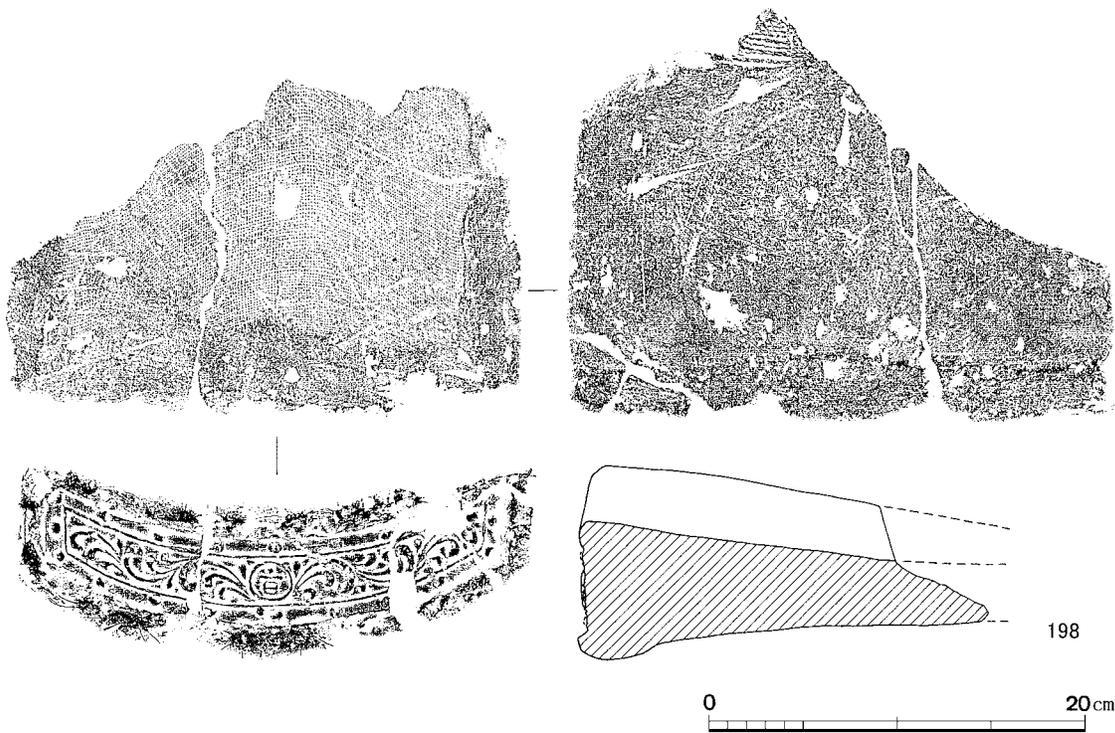
202の緑釉陶器椀は淡橙灰色を呈する素地に、全面淡黄緑色の釉が薄く刷毛塗りされている。211の唾壺は淡橙灰色の堅緻な焼成の素地に、淡緑灰色の釉がかけられている。外面体部との接合部付近には釉がかからない部分も存する。

220の大椀は、ヘラミガキによる調整の後、陰刻による文様が全面に施されるものである。内面では、見込みには花文の上に魚が描かれている。欠損のため、魚は尾と背鰭のみ残存する。体部内面には連続する文様に鳥が配されている。体部外面は飛雲文らしき文様が展開される。削り出し高台の底面にも一部陰刻が認められる。3カ所に焼成時の焼き割れが認められ、ひずみは器壁分程になる。

215の土師器杯Aは淡赤灰色を呈する精良な胎土で、外面は端部外面を強くなでる他は、粗いナデによって調整される。216は赤灰色を呈し、長石の微粒子を多く含む胎土で、内外面ともナデ調整される。口縁部および、体部外面には煤が付着している。212は石英、チャートの石粒を



第26図 井戸 S E 66801下層出土遺物実測図 - 3 (1/1)

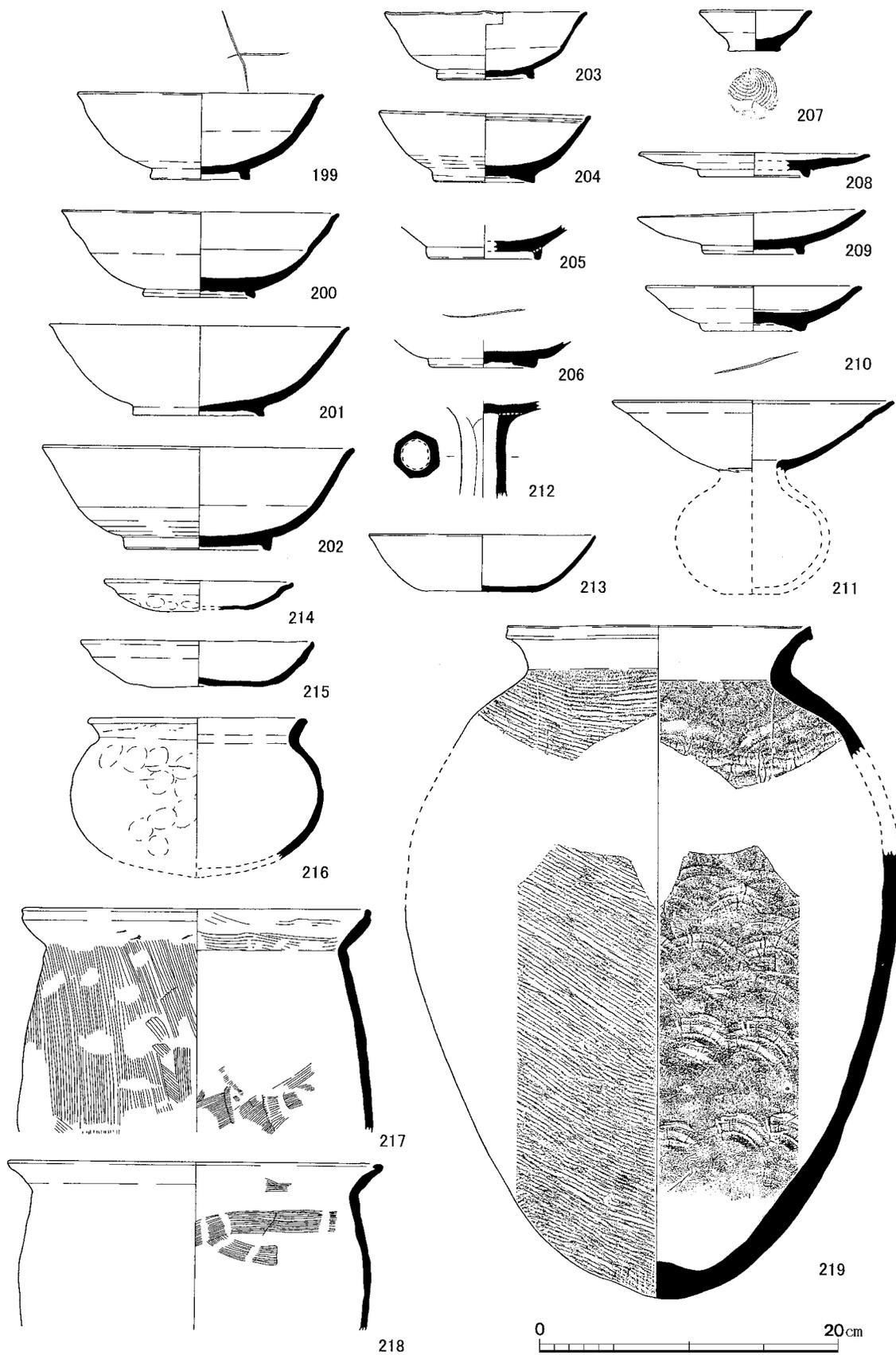


第27図 井戸 S E 66801上層出土遺物実測図 - 1 (1/4)

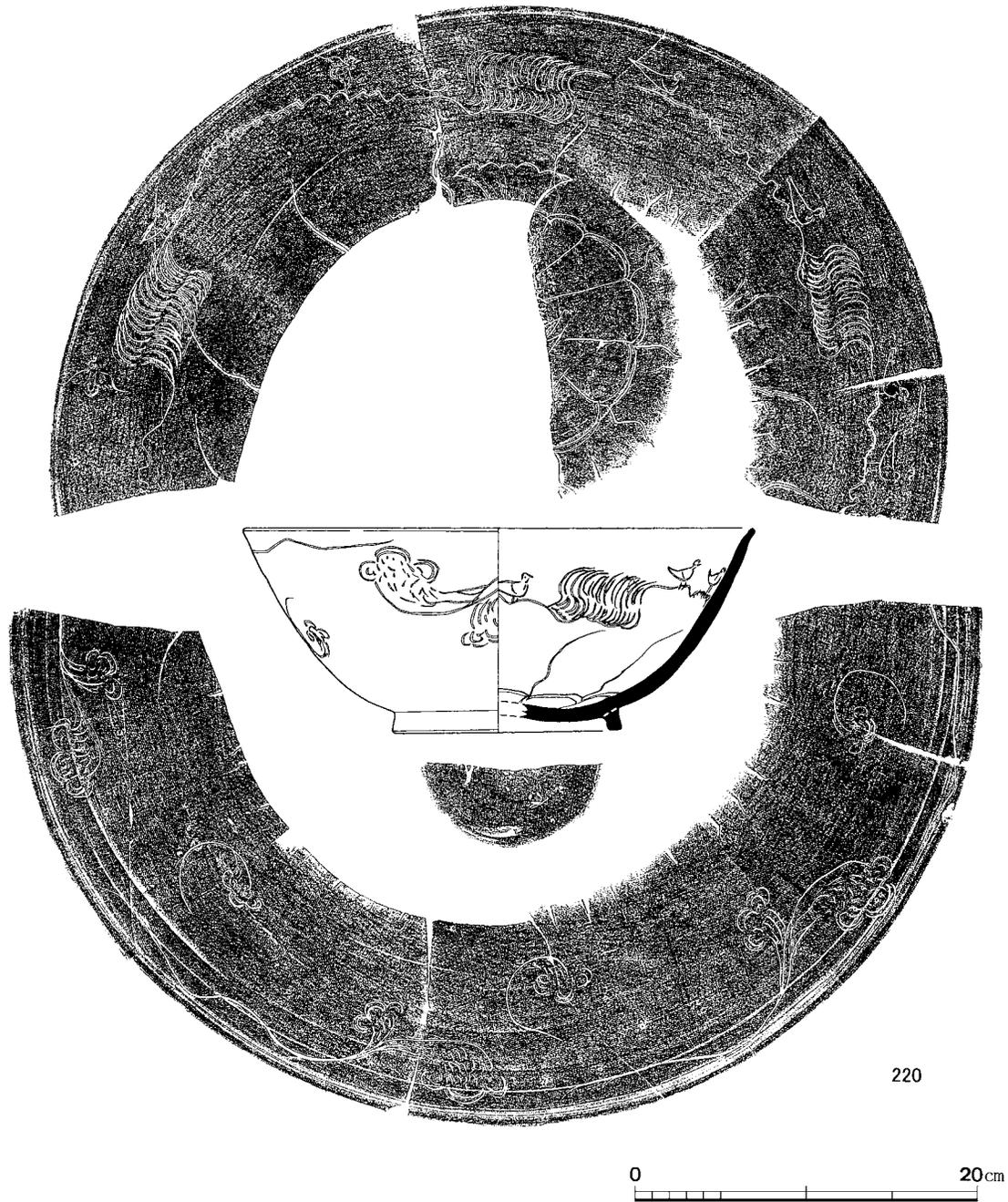
含む粗い胎土で、淡赤褐色を呈している。脚部は粘土紐巻き上げによって成形され、外面は7面に面取りされる。

213は黒色土器A類である。胎土は暗赤褐色を呈し、赤色粒子を含んでいる。火を受けているため表面の残りは非常に悪い。

他に2層から図版14の鉄滓が出土している。いずれも裏面が椀形をしており、一部壁土が付着



第28図 井戸 S E 66801上層出土遺物実測図 - 2 (1/4)

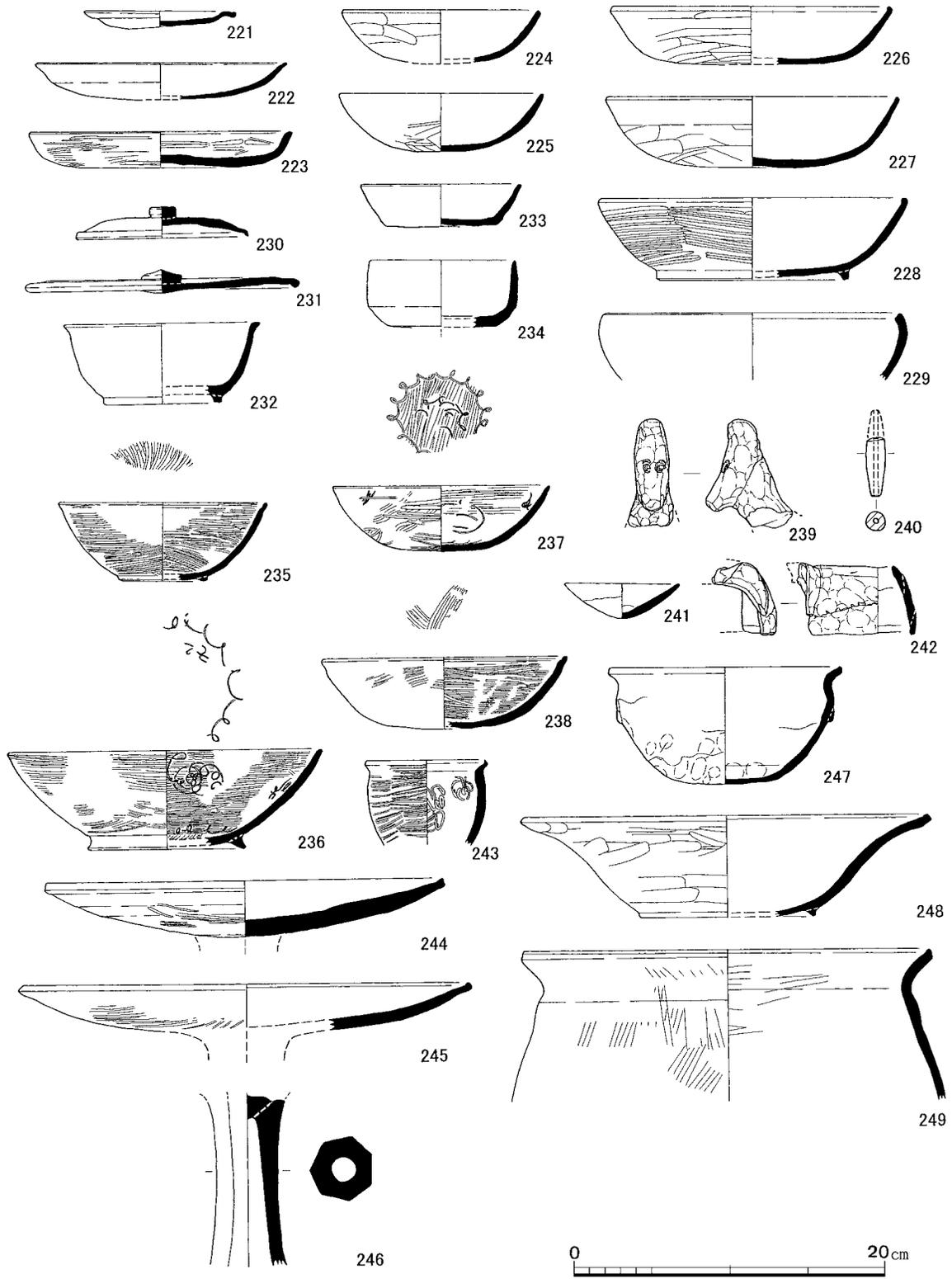


第29図 井戸S E 66801上層出土遺物実測図 - 3 (1/4)

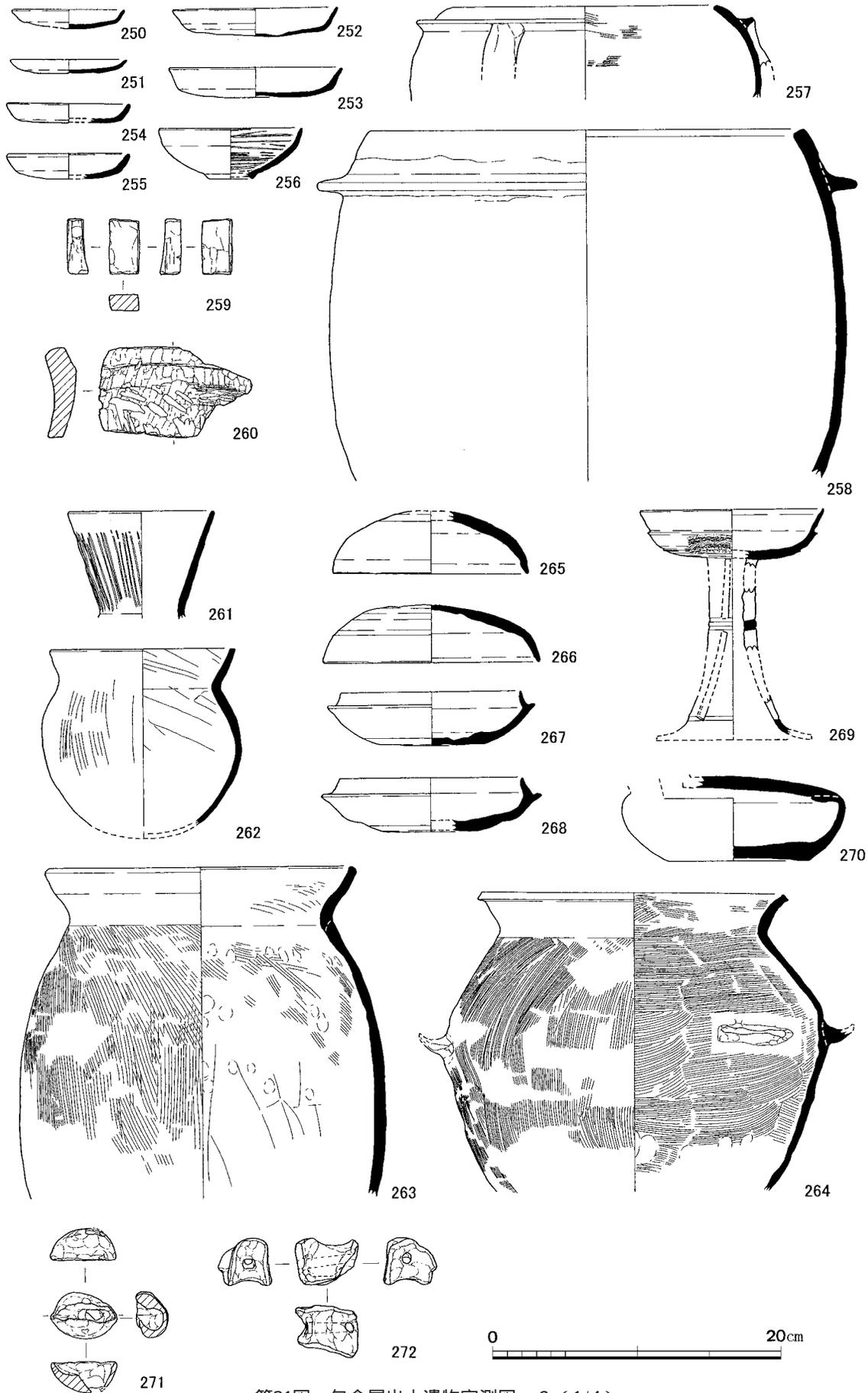
している。

これら井戸上層遺物の年代は、9世紀中頃から10世紀にかけてのものであり、若干の時期幅が認められる。

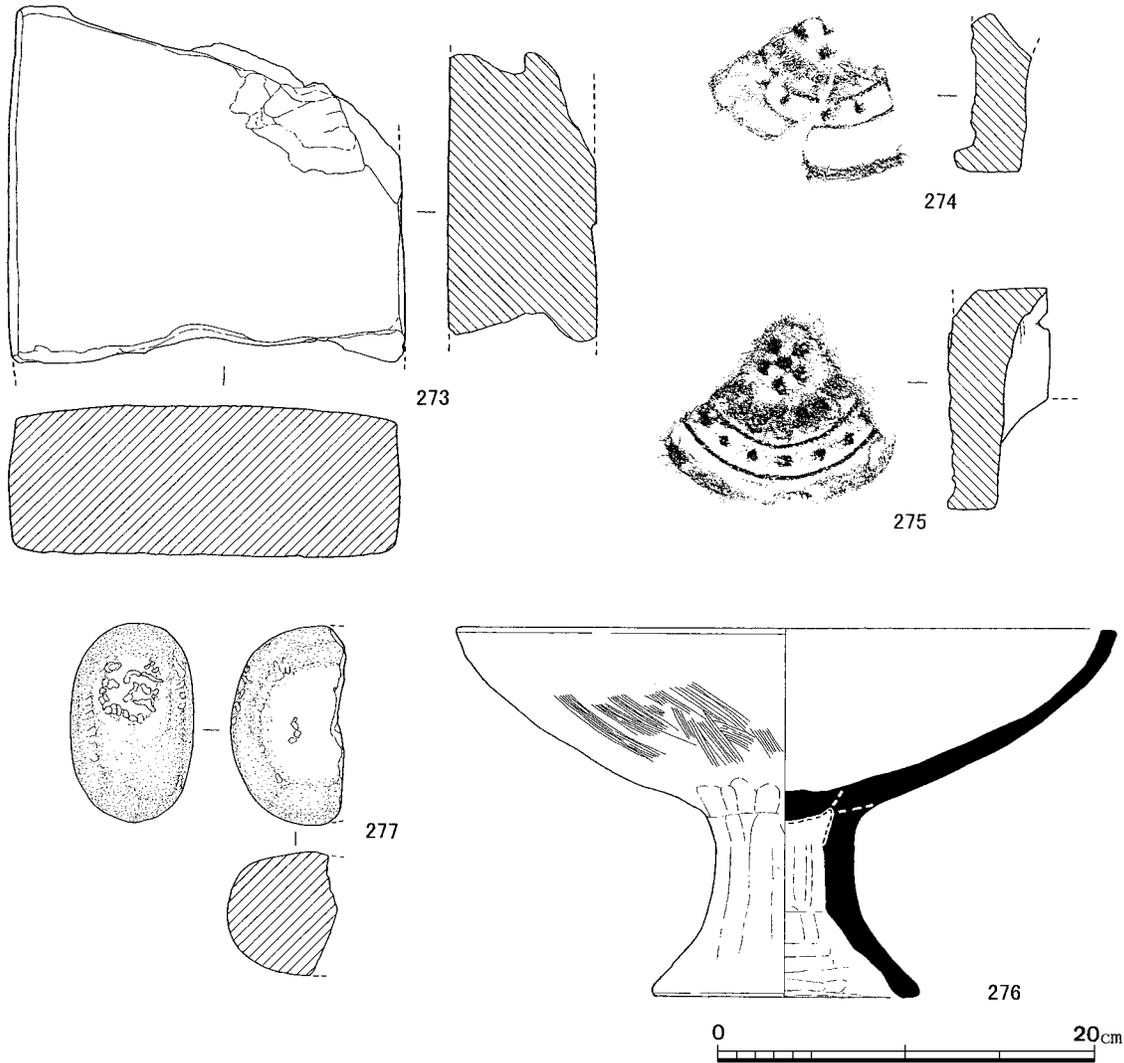
包含層出土遺物（第30図～第32図） 第1層、第2層からは各時代の遺物が大量に出土している。第2層出土のもので問題になるのは264の甕であるが、第2層掘り下げ中に一括して破片が出土したもので、遺構ないし第1層の部分的窪みになると予想していたところからの出土である。これ以外は、277の叩き石を除いて図示したもの全て第1層出土のものであり、第2層が縄文時代の遺物包含層になる可能性が考えられる所以である。以下古い順に概略を述べる。



第30図 包含層出土遺物実測図 - 1 (1/4)



第31図 包含層出土遺物実測図 - 2 (1/4)



第32図 包含層出土遺物実測図 - 3 (1/4)

弥生時代の遺物は量的に少ない。276は中期の台付き鉢である。口縁端部は上向きの平らな面を作り、杯部は内外面刷毛調整する。台部は端部外面をなでる以外はケズリを施している。淡赤灰色を呈し、0.5～3mm程のチャートを多く含んでいる。

古墳時代の遺物では、263の長胴甕は、S D 66808、S D 66809と接合する資料であり、本来溝の項で報告すべきものであるが、古墳時代後期の資料であるため、ここに掲載した。264は把手付き甕で、体部最大径に扁平な把手が付く。明赤灰色を呈する比較的精良な胎土で、1mm以下のチャートを含んでいる。他に262の小型甕がある。

須恵器では265～269の須恵器杯、杯蓋、無蓋高杯がある。これらは陶邑編年TK43型式からTK209型式頃と並行するものである。他に須恵器器台の脚部片(図版14)も出土している。

261は土師器壺の口縁部である。赤灰色の精良な胎土で、外面には暗文状のミガキが施される。7世紀前半代のものと考えられる。

時期は不明であるが、271、272の土製品も出土している。271は土鈴、272は鞍になる可能性が考えられる。明黄灰色の石粒を含まない胎土である。272には貫通する穴が開けられている。

長岡京期前後から平安時代のものには、土師器では椀A(224、225)、杯A(226、227)、杯B(228)、皿(221~223)、鉢A(229)、壺B(247)、盤B(248)、高杯(244~246)、小壺(243)が出土している。

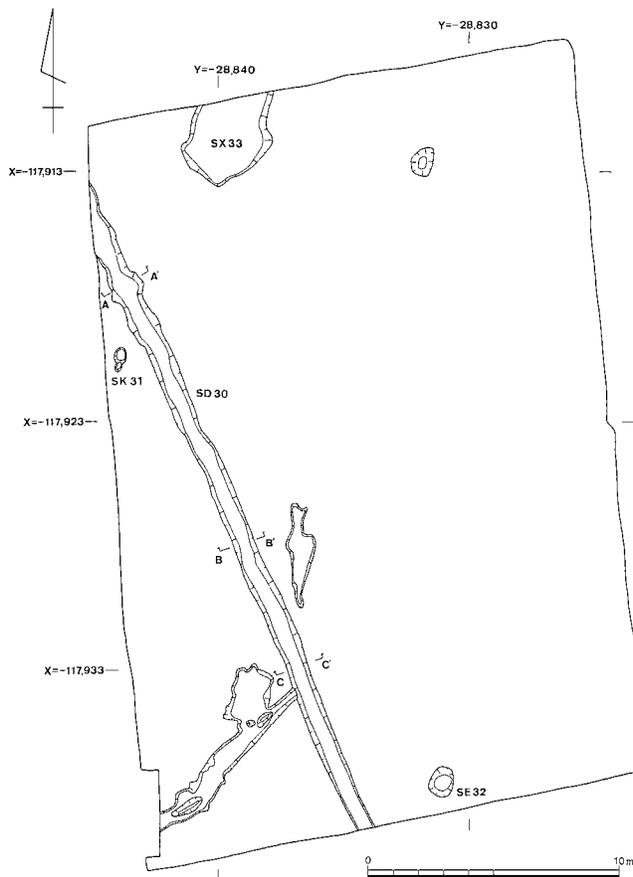
243は小さく上方につまみ上げた口縁で、淡橙灰色の精良な胎土である。外面は横方向に丁寧に磨き、内面はヘラ状工具によってなでた後に暗文を施す。244は杯部がほぼ残っているもので、杯部を単独で作成した後に脚部を接合するものである。外面はヘラケズリした後に粗いミガキを施す。脚部を作りつけてから面取りを行っており、八角にヘラの当たった痕跡を残す。淡灰橙色を呈し、焼きは甘い。

須恵器では杯(232~234)、蓋(230、231)、平瓶(270)などがある。他に円面硯の脚部片(未掲載)も出土している。234は底部を糸切りするもので、高杯になる可能性も考えられる。

黒色土器(235~238)は、236、237がA類、他はB類である。瓦類では274、275共に単弁蓮華文の軒丸瓦である。同型式と考えられるが、型式は不明である。273は磚である。削りによって調整される。時期は不明であるが砥石(259)も出土している。

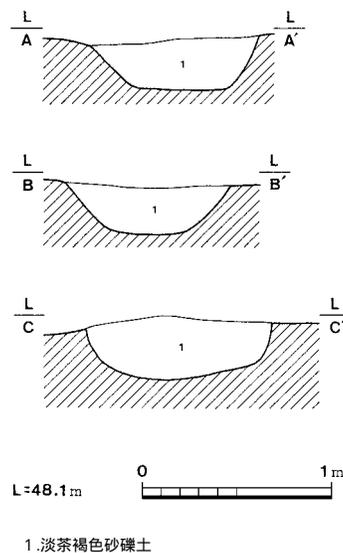
図版15は包含層から出土している須恵器陰刻花文の破片である。体部内面もしくは見込みに陰刻されているもので、白色を呈する軟質のもの、青灰色に堅く焼かれたものがある。

これらの遺物の中でも、土馬(239)、ミニチュアカマド(242)、カマコ(241)等も含めて、長岡京期のものが量的に多いが、溝出土遺物と同様、土師器高杯など編年の位置付けに問題のあるものも多い。他に白磁片(図版15)も出土している。

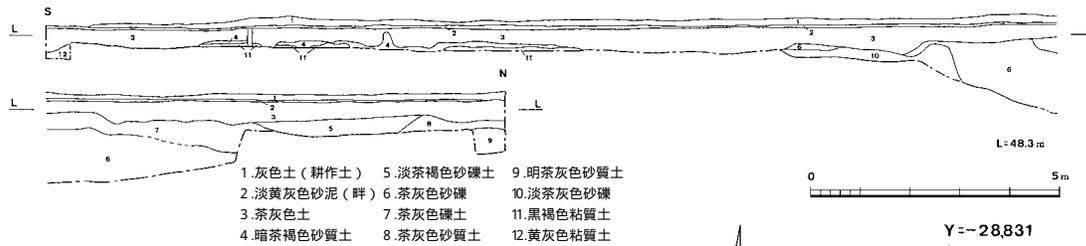


第33図 右京第201次調査検出遺構図(1/300)

中世遺物では、土師器皿(250~253)、羽釜(258)、瓦器では皿(254、255)、小椀(256)、羽釜(257)、滑石製羽釜(260)等が出土している。



第34図 溝SD 20130断面図(1/40)



第35図 トレンチ西壁断面図(1/150)

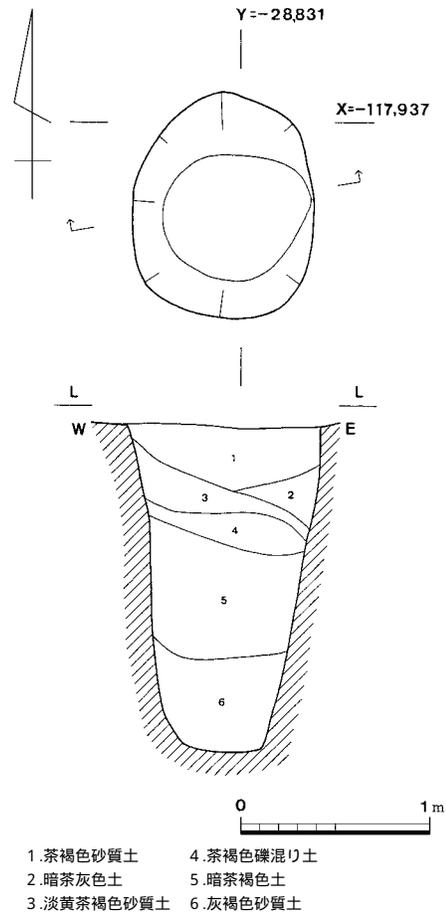
5 付編 右京第201次調査の概要

(1) 調査の概要

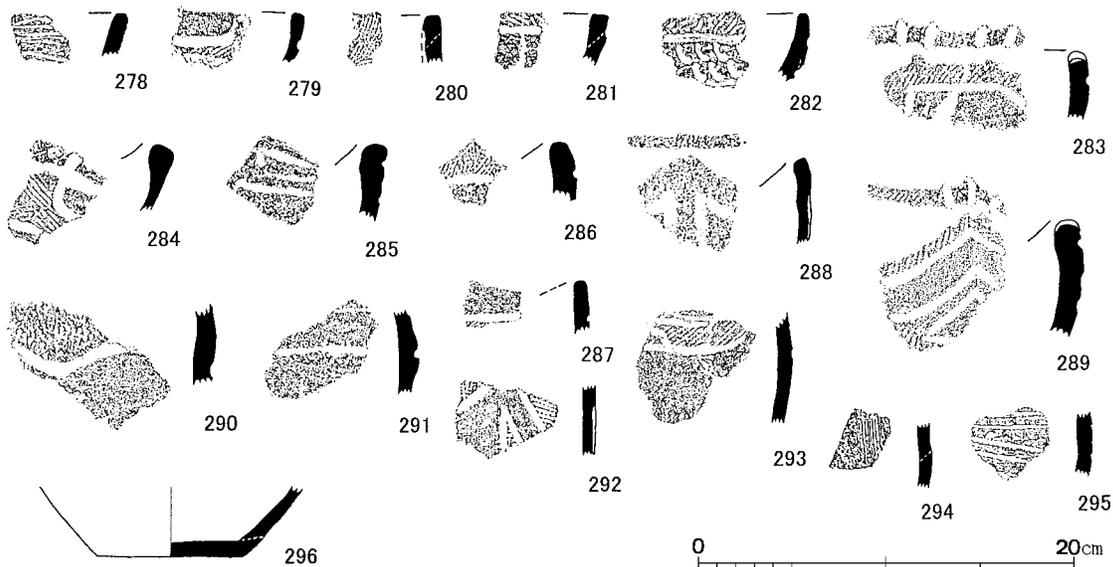
今回報告した右京第668次調査に関連して、昭和60年度に実施した右京第201次調査の概要も合わせて掲載したい。調査地は今回の調査地の東13mで実施しており、これまで概略しか報告できていなかったものである。なお一部の縄文時代遺物は、長岡京市史(資料編一)に朝日寺遺跡出土として紹介されているが、今回それらも含めて再録した。

調査地の層序並びに出土遺物の傾向 第35図は調査トレンチの西壁断面図であるが、断面図3層(茶灰色土)が右京第668次調査で報告の第1層に相当すると考えられる。また5層はS D 20130の埋土である。

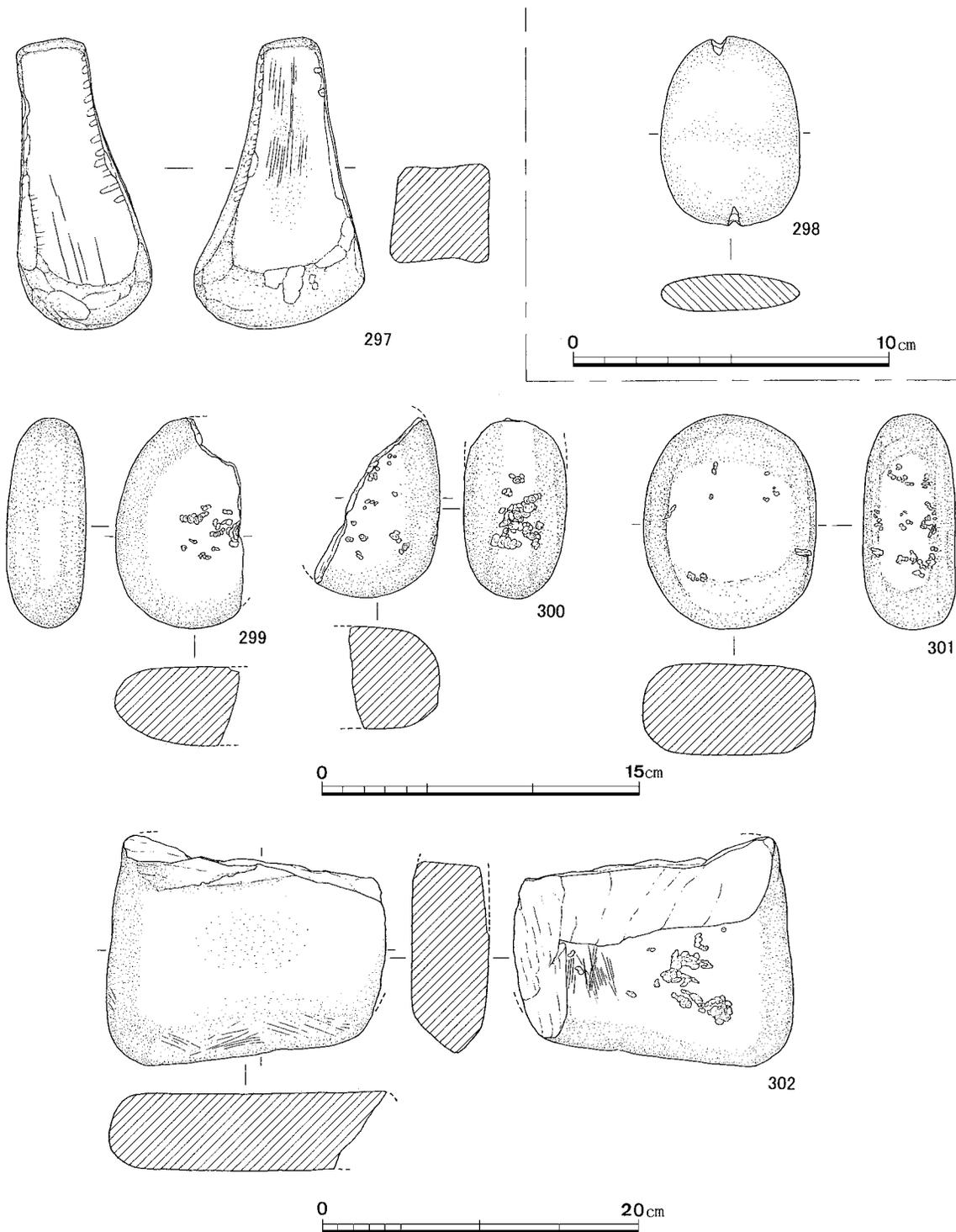
遺構の確認は3面にわたって行った。第1面は耕作土・床土層を除去した面で、南北方向の細い溝やピットを検出している。第2面は遺物包含層上面および地山面で検出された遺構で、第33図に示した。第3面はこれらの遺構に切



第36図 井戸S E 20132平断面図(1/40)



第37図 包含層出土縄文土器実測図(1/4)

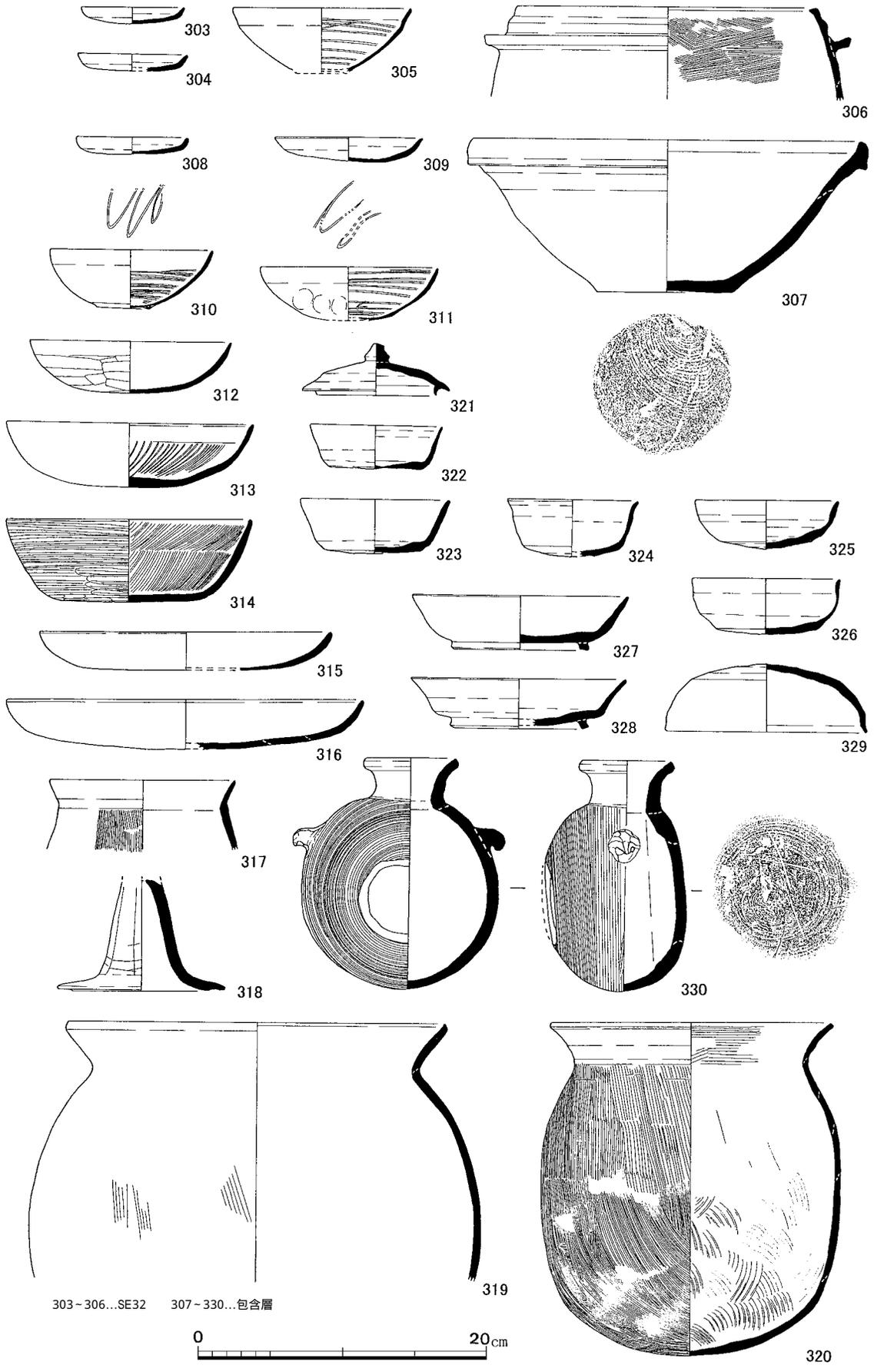


第38図 包含層出土石器実測図(1/2・1/3・1/4)

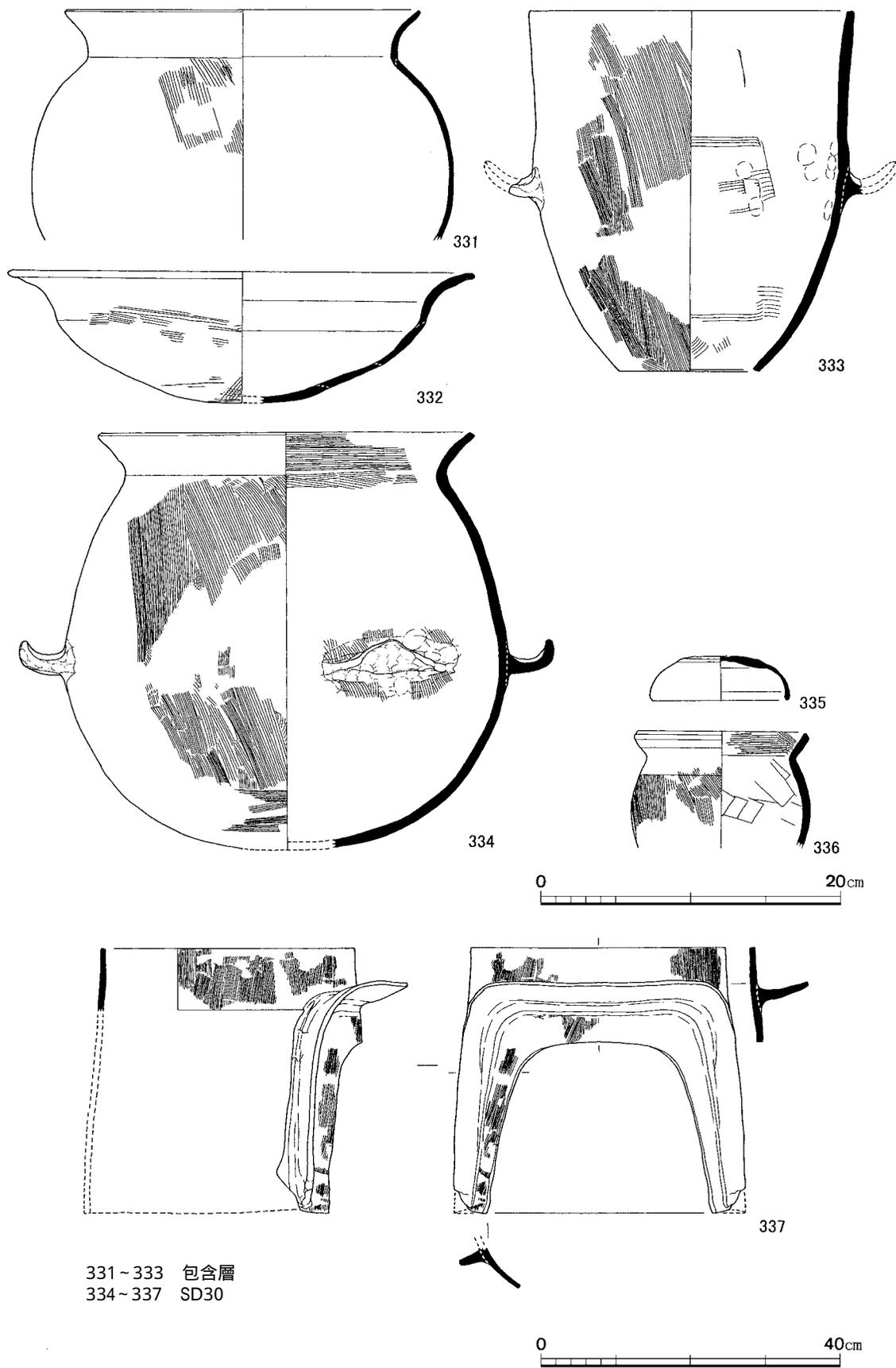
られる自然流路堆積で、遺物は全く出土しておらず、地山層の状況と考えている(6~10層)。

S D 20130は幅0.7~1m、深さ0.25~0.4mを測る北西から南東に流れる溝である。埋土は淡茶褐色礫混り土の単一層で、地山面で検出されている。しかし溝の上層から接合する資料や同時期の土器が多く出土しており、右京第668次調査での様相とよく似ている。

この溝は北で西に約24度振れて直流しており、その北西方向では右京第668次調査地にもかかるはずであったが、右京第668次調査では検出することができなかった。さらに溝の延長上にS



第39図 包含層出土土器実測図(1/4)



第40図 溝 S D 20130・包含層出土土器実測図 (1/4・1/8)

H66810が位置していることから、S D20130は調査区の北で終わるか、北方へ曲がるものと考えられる。両者とも振れ角が似ており、また時期的にも近い遺構であると考えられることから、何らかの関係があるものと考えられる。

S E 20132は中世の素掘り井戸である。直径1 m前後の円形プランで、深さは1.7m程であった。

(2) 出土遺物

包含層出土遺物（第37図～40図） 第37図は包含層出土の縄文土器である。文様の種類としては、条痕文（278）刺突文（282）条線文（294、295）の他は磨消縄文がほとんどである。282は口縁端部をやや四角く作り、端部外面下の沈線との間に縄文を施している。沈線は横方向に2条巡らせ、その間にC字形の刺突文を2列配している。283は波状口縁の波頂部を平坦にカットしているもので、平坦部の両端には2条の沈線によって突起を作り出しているものである。

口縁の形態は波状口縁のものが多く（279、280、284～289）、284は体部文様の沈線が口縁端部上面にまでおよんでいる。289は口縁端部上面に平らな面を作り、端部下面の沈線までの間および上面にも縄文を施している。波頂部は3条の沈線によって2個の突起を形成する。

これらの土器の胎土は、288が片岩系の石粒を含む搬入土器であると考えられる他は、長石、チャートを含む在地系の胎土である。色調は黄褐色から暗褐色系の色調が多い。

これらの土器の時期は、文様構成を掌握できる個体がないことから詳細については不明であるが、磨消縄文を中心とすることから後期の範疇と考えられる。

第38図は包含層出土の石器類である。298から302は縄文時代の石器で、298は切り目石錘、299～301は磨石・叩石、302は石皿である。石材は300以外は砂岩を使用している。297は砥石で、四面が使われている。中央から折れた後も、二次利用されている。時期不明。

第39・40図は包含層から出土している縄文時代以後の土器類である。古墳時代から中世までの土器が出土している。

古墳時代の土器としては、須恵器杯蓋（329）、提瓶（330）、土師器甕（317）等がある。329は明青灰色を呈し、長石、チャート、黒色粒子を若干含んでいる。天井部と体部の区別もなくなりかけており、削りの範囲も狭いことから、陶邑編年MT85型式並行期と考えられる。330も口縁端部を外側に肥厚させて面を作る特徴などから同様の時期に位置づけられよう。体部外面はカキ目で調整する。体部成型時の充填面が剝離している以外は完形で出土しており、古墳の副葬品の可能性が考えられる。淡赤灰色を呈する精良な胎土である。317は小型の甕であるが、火を受けて表面が剝離している。かろうじて体部外面の縦ハケが観察される。明赤灰色を呈し、胎土に長石、チャート、赤色粒子を含む。

古墳時代から飛鳥時代にかけての時期の遺物には、須恵器杯G（322～326）、杯G蓋（321）、土師器杯C（313、314）、高杯（318）等がある。319、320、331の甕や333の甎も当時期に含まれると考える。321は宝珠つまみを有する返り付きの蓋で、天井部には自然釉が付着している。返りの部分には杯口縁端部が融着しており、セットで焼成されたことがわかる。322～325はいずれも底部ヘラオコシのまま未調整である。325は回転を利用してヘラオコシしたと考えられる。い

ずれも口縁端部が若干外側へ開く。318は土師器高杯脚部であるが、裾部のナデは粗く凹凸を残す。柱状部はヘラでなでられ、面が形成される。淡赤灰色の精良な胎土である。313は外面ナデ調整で、内面には放射状の暗文を1段施す。314は外面を丁寧に磨き、内面には2段の放射状暗文を施す。色調は313は淡赤灰色、314は暗赤灰色の精良な胎土である。333は内外面ハケメ調整され、扁平な把手が付く。口縁端部は上向きの面を作り、底部の穴は1孔と思われる。

奈良時代の遺物には、須恵器杯B(327、328)がある。いずれも高台は四角く、焼きもしっかりしている。

長岡京期を含む平安時代の遺物には、土師器椀A(312)、皿A(315、316)がある。312はc手法の椀であるが、315、316は残りが悪く、調整は不明である。

中世の遺物としては、須恵器鉢(307)、土師器皿(308、309)、瓦器椀(310、311)がある。307は灰白色を呈した鉢で、底部は糸切りする。皿は口縁端部をなでる他は未調整のものである。瓦器椀は体部外面のミガキはすでになく、311には高台が付けられていない。

遺構出土遺物(第39・40図) S D 20130からは須恵器蓋(335)、土師器甕(336、334)、移動式竈(337)等が出土している。335は端部が丸く若干内湾する。天井部はロクロからヘラオコシされた後、軽くなでられる。淡青灰色を呈し、長石を若干含む。陶邑TK217型式並行期の杯H蓋になると考えられる。336は小型の甕で、全体的に厚手の造りである。口縁端部は外傾する面をもつ。体部は内面を粗く削り、外面は縦方向の刷毛を施す。赤灰色を呈し、石英、長石を含む。334は甕Bである。最大径は体部中央にあり、扁平な把手が付く。明赤灰色を呈し、赤色粒子を含む胎土である。337は付け底の移動式竈で、明赤褐色を呈し、長石の微粒子を多く含んでいる。内面および底下面には煤が付着している。

319、320、331～333も出土場所が当溝の近くであり、破片がまとまって出土していることから、当溝の遺物である可能性が高い。

S E 20132からは、土師器小皿(303、304)、瓦器椀(305)、羽釜(306)等が出土した。他に平瓦が4点出土している。うち3点は1枚造りで、1点には凹面が格子目叩き、端面に「」の刻印が認められるものである。1点は縄目叩きで桶巻き造りのものである。

これらの遺物からこの井戸は、13世紀末から14世紀にはいる頃の時期と考えられる。

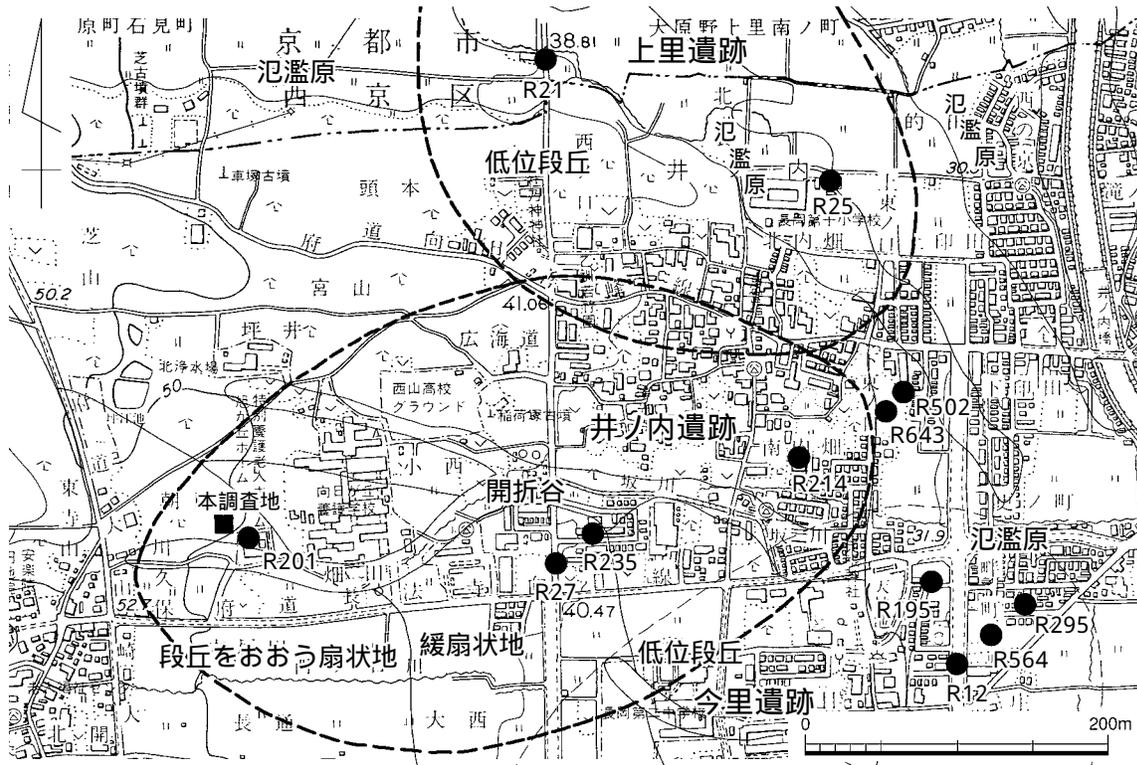
6 まとめ

以上のように、この地域の調査では多時期にわたる遺構・遺物が検出されている。一連の調査では、右京第372次調査⁽⁵⁾も行われているが、ここでは面的な削平を受けており、遺構は既に残存していなかった。また、遺物の種類と量に比較して、遺構の確認が希薄であるが、これは耕作などによる攪拌を受けているためであると考えられる。

以下、主な時代について若干のまとめをしておきたい。

(1) 縄文時代・井ノ内遺跡の様相

井ノ内遺跡では、右京第27次調査等⁽⁶⁾の府道大山崎大枝線の調査で、後期の土器や石器などが出



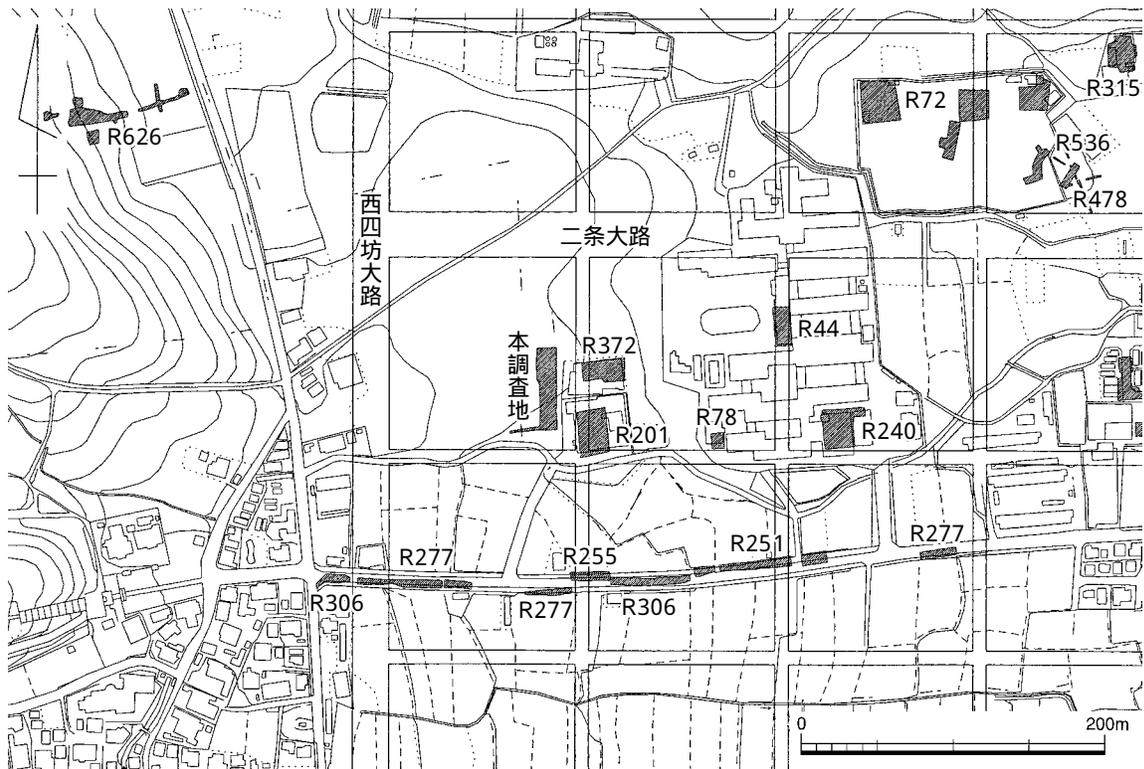
第41図 井ノ内遺跡周辺の縄文時代確認地点 (1/5,000)

土し、井ノ内遺跡に縄文時代後期の遺物が存在することが確認されていたが、その実体はまだよくはわかっておらず、むしろ右京第25次調査⁽⁷⁾で中期末から後期にかけての遺構が検出されているなど、北隣りの上里遺跡や南東に広がる今里遺跡の方が確認例が豊富であった。

その後、右京第201次調査によって後期の遺物が比較的多く検出されたが、その出土状況から二次的な資料である可能性を考えたのは前述した。しかし右京第214次調査⁽⁸⁾で後期の土坑が検出され、右京第235次調査⁽⁹⁾で後期の竪穴住居が検出され、今回の調査で後期・晩期の遺構が確認されたことにより、井ノ内遺跡の内容も充実したものになってきた。そこでこれら周辺の状況も含めて、縄文時代集落の分布を検討することも可能になってきた。

これまで上里遺跡・今里遺跡の確認地点は、低位段丘 から沓瀬源にかけての地形変換ラインに沿って分布する傾向が認められた。しかし、右京第235次調査地点や今回の例は、段丘でもより丘陵に近い緩扇状地や段丘をおおう扇状地にも生活痕跡が認められ、上里・井ノ内・今里という遺跡の範囲とは別に、開析谷や地形を考慮したまとまりが見えてきた。つまり、低位段丘から沓瀬源の縁辺に分布が認められる上里遺跡と、井ノ内遺跡の東部地域（第41図・R214・R502・R643）今里遺跡、それに段丘に切り込む谷によって区画される井ノ内遺跡中部地域（同・R27・R235）と今回の調査地である西部地域である。

これらの地域はいずれも後期・晩期の時期を中心としており、中でも古いのが中期に入る右京第25次調査の東部地域である。今里遺跡では右京第12次調査⁽¹⁰⁾で中期～晩期の遺物が出土している他、右京第195次調査⁽¹¹⁾では晩期の壺棺が検出されている。これらの詳細はさらに資料の増加を待って再度検討したい。



第42図 調査地周辺の条坊 (1/5,000)

(2) 長岡京期の様相

今回の調査地点は、長岡京条坊では右京三条四坊十六町にあたるが、周辺ではまだ条坊遺構が確認されておらず、正確な長岡京内の位置が確認されていない。そこで現在使用している条坊復原図の国土座標数値⁽¹²⁾をもとにここでは検討したい。

復原によると、調査地の南には三条条間北小路が通り、また西には西四坊坊間西小路が通ることになる。その数値は三条条間北小路北側溝心が $X = -117,935.8$ であり、また西四坊坊間西小路東側溝心は $Y = -28,836.91$ 、西側溝心は $Y = -28,845.79$ である。この数値でいくと、今回のトレンチ南端から12.8m南に三条条間北小路北側溝が所在し、またトレンチ東端より12.2m東に西四坊坊間西小路西側溝が通ることになる。一方、右京第201次調査トレンチでは西四坊坊間西小路東側溝が通る事になるが、調査では検出されていない。今回のS D66808・09は東ほど浅くなっている状況があり、残存していなかった可能性も考えられるが、右京第201次調査では長岡京期の遺物がほとんど出土しておらず、道路の存在については不明といわざるを得ない。

次に今回検出のS D66808・09の座標を見てみると、十六町の中央座標は、二条大路南側溝心が $X = -117,810.0$ であることから、 $X = -117,872.9$ となり、ほぼS D66808 ($X = -117,872.3$)の位置になる。つまり、右京三条四坊十六町を南北に二分する位置にS D66808・09が造られている可能性が考えられ、調査地は十六町の南半に占める宅地部分であることがわかる。しかし周辺条坊が未確認であるため、今後の調査の進展を待つ必要がある。

今回の調査で特徴的なのは、出土遺物が豊富なことである。中でもS E66801下層出土の木製品は、櫛の多さや物指、挽物の合子など一般的な井戸とは異なる傾向が伺われる。また土器では

形になる壺類が多いことも特徴といえる。S D 66808・09出土遺物も特異な傾向を見せる。須恵器では把手付き杯や高杯の存在、土師器では暗文を多用する高杯など、複数の産地から搬入されている可能性を示唆している。ここでも完形の壺Mの多さは井戸と共通する。

これらの土器は編年的問題もあるものの、都の西端ではあるが、二条大路に接した町である当地に居住した人の階層を反映しているものと考えられる。また、調査地の北西約320mで実施した右京第626次調査⁽¹³⁾では、長岡京期の祭祀遺物を含む幅3m程の溝が検出されており、今後周辺の調査に注目される。

(3) 長岡京期前後の様相

長岡京期以前では、6世紀後半から7世紀前半にかけての遺物が多く出土している。遺構的には少ないものの、S D 20130出土遺物を中心に包含層も含めると、今里大塚古墳成立期前後の乙訓の様相を伺う資料として重要である。

長岡京期以後は、S E 66801上層出土遺物と包含層出土遺物があげられる。当該期の遺構は検出されていないが、量的にまとまった資料といえる。中でもS E 66801上層出土遺物は、時期的に若干幅が認められるものの、検出例のまだ少ない時期として良好なものである。特に陰刻花文の須恵器は、乙訓寺周辺の今里遺跡で多く出土するが、その範囲が当地までおよぶ可能性を示唆するものである。陰刻文の大椀は類例の少ないものであるが、鳥を配するものであることと、焼き歪んで製品にならないようなものであることを考慮すると、近隣に所在する窯として、京都市西京区大原野に所在する石作窯ないし小塩窯の製品と考えられる。このような土器と唾壺の存在を合わせると、ある程度の階層の人間が住まいしたことを裏付けるものであろう。また井戸出土の鉄滓は、工房を伴うことを示唆しており興味深い。以上簡単ではあるが今回の報告のまとめとしたい。

- 注1) 小田桐 淳「右京第201次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年
 2) 石尾政信「長岡京跡右京第240次発掘調査概要」『京都府センター概報』第23冊 1987年
 3) 岩松 保「長岡京跡右京第277・306次発掘調査概要」『京都府センター概報』第34冊 1989年
 4) 注3に同じ
 5) 原 秀樹「右京第372次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
 6) 奥村清一郎他「長岡京跡第27次発掘調査概要」『京都府概報』第2分冊 1980年
 7) 山本輝雄「長岡京跡右京第22・25次調査報告書」『長岡京市センター報告書』第11集 1997年
 8) 山本輝雄「右京第214次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年
 9) 山本輝雄・岩崎 誠「右京第235次調査略報・右京第253次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和61年度 1988年
 10) 高橋美久二他「長岡宮跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報』1979年、高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』第2分冊 1980年
 11) 岩崎 誠「右京第195次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和60年度 1987年
 12) 「長岡京条坊復原図」(財)向日市埋蔵文化財センター『年報 都城10』付録 1999年
 13) 原 秀樹「長岡京跡右京第626次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

報告書抄録

| | |
|--------|-------------------------------|
| ふりがな | ながおきょうしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 長岡京市埋蔵文化財調査報告書 |
| 副書名 | 長岡京跡右京第668次調査報告 |
| シリーズ名 | 長岡京市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第21集 |
| 編著者名 | 小田桐 淳 |
| 編集機関 | 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10・1 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|-------|-----------|--------------|---------------|----------------------|-------------------|------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| ながおきょうあと 長岡京跡(右京第201次) いのうちいせき 井ノ内遺跡 | ながおきょうしいの 長岡京市井ノ うちあさひでら 内朝日寺23 | 26209 | 107 15 | 34° 56 11 | 135° 41 04 | 19850704 19850904 | 600m ² | 施設新築 工事 |
| ながおきょうあと 長岡京跡(右京第668次) いのうちいせき 井ノ内遺跡 | ながおきょうしいの 長岡京市井ノ うちあさひでら 内朝日寺27・2 他 | 26209 | 107 15 | 34° 56 12 | 135° 41 02 | 20000321 20000529 | 682m ² | 施設増築 工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|------------------------|------------|---|--|--|-----------|
| 長岡京跡(右京第201次) 井ノ内遺跡 | 都城跡 集落跡 | 長岡京期 縄文時代 古墳時代 飛鳥～奈良時代 鎌倉時代 | 包含層 包含層 溝 包含層 井戸 | 土師器、須恵器 土器、石器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、瓦器、瓦 | 右京三条四坊九町 |
| 長岡京跡(右京第668次) 井ノ内遺跡 | 都城跡 集落跡 | 長岡京期 縄文時代 古墳時代 飛鳥～奈良時代 平安時代 鎌倉時代 | 溝、井戸 土器棺墓、土坑 竪穴住居、土坑 包含層 包含層 柱穴 | 土師器、須恵器、瓦、 木器 土器、石器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 土師器、須恵器、緑釉 陶器、黒色土器 土師器、瓦器、陶磁器 | 右京三条四坊十六町 |



版



(1) 調査トレンチ1遠景(東から)



(2) 調査トレンチ2遠景(東から)

長岡京跡右京第668次調査

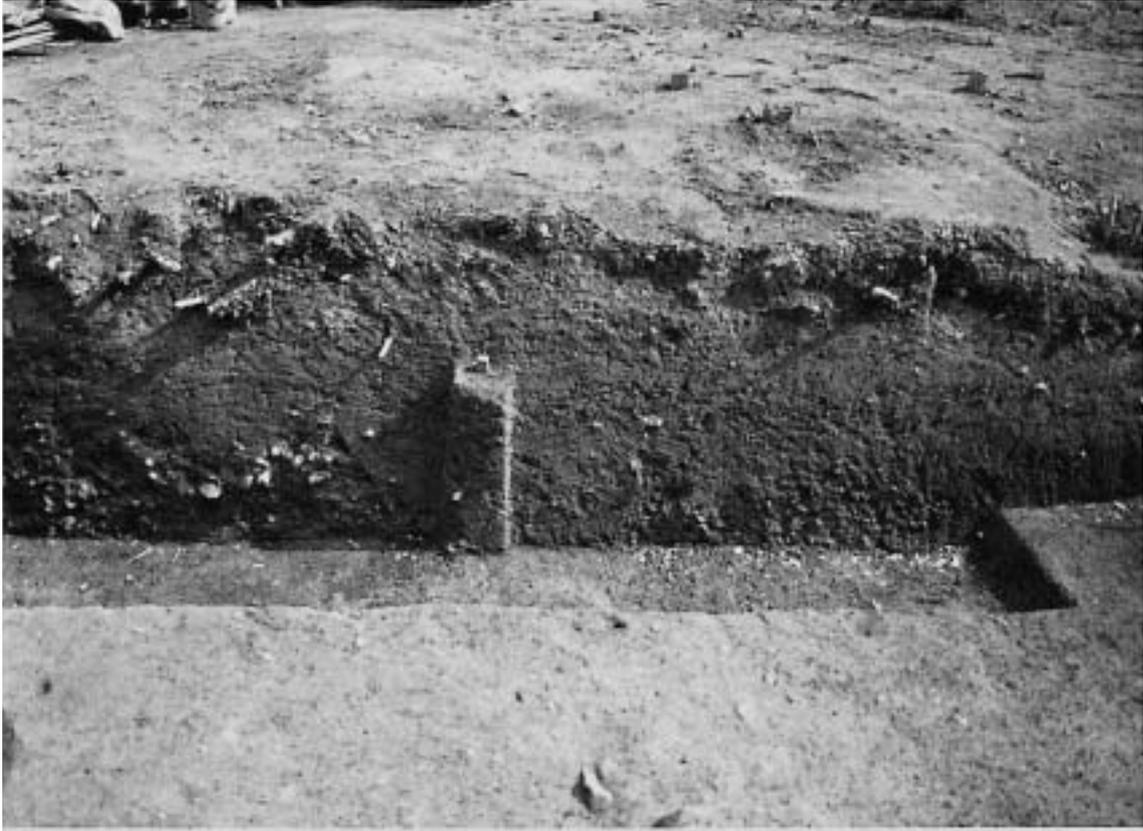
図版
一



(1) 調査トレンチ1全景(北から)



(2) 試掘トレンチ西部(東から)



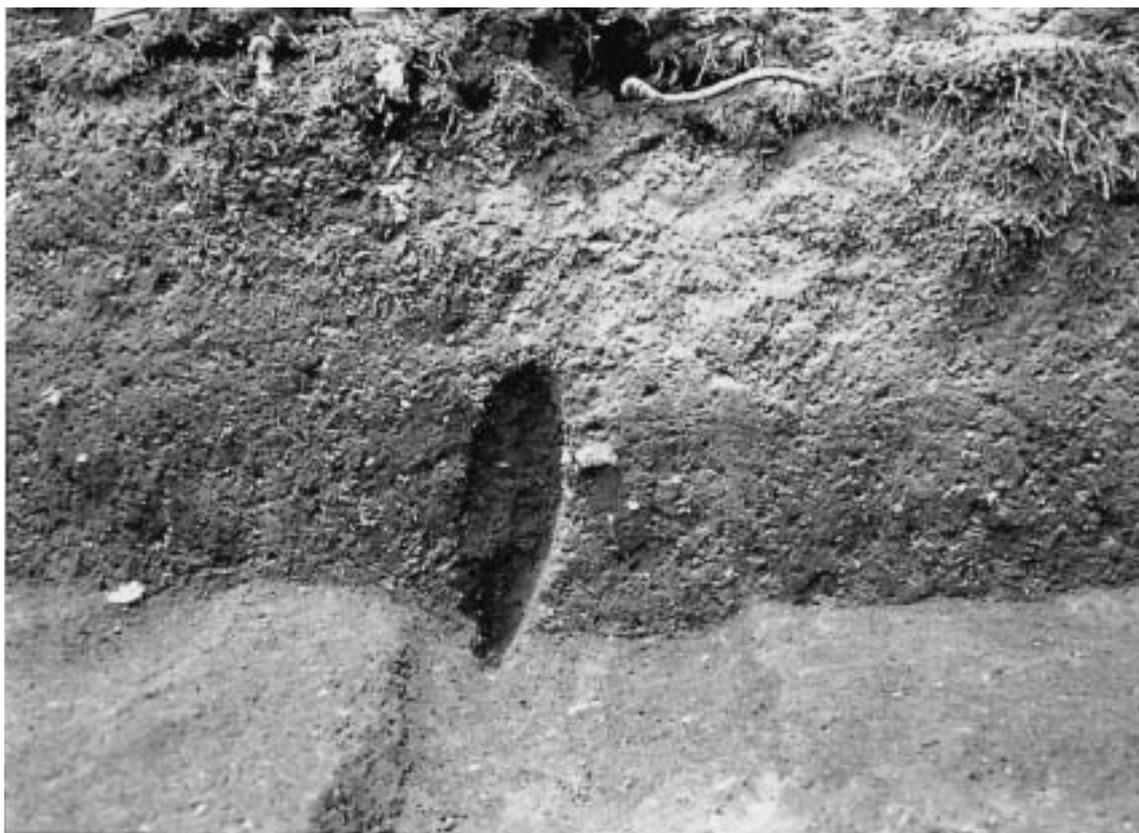
(1) 調査トレンチ1南壁の土層(北から)



(2) 調査トレンチ1西壁の土層(東から)



(1) 調査トレンチ 2 西壁の土層 (東から)



(2) 第 2 層と溝 SD66809 埋土 (東から)



(1) 溝SD66809・溝SD66808 (東から)



(2) 溝SD66809断面 (東から)



(3) 溝SD66808断面 (東から)



(1) 井戸SE66801断面 (南から)



(2) 井戸SE66801 (西から)



(1) 井戸SE66801上層断面 (南から)



(3) 井戸SE66801・井戸側 (西から)



(2) 3層土器出土状況 (東から)



(4) 土坑SK66804 (東から)



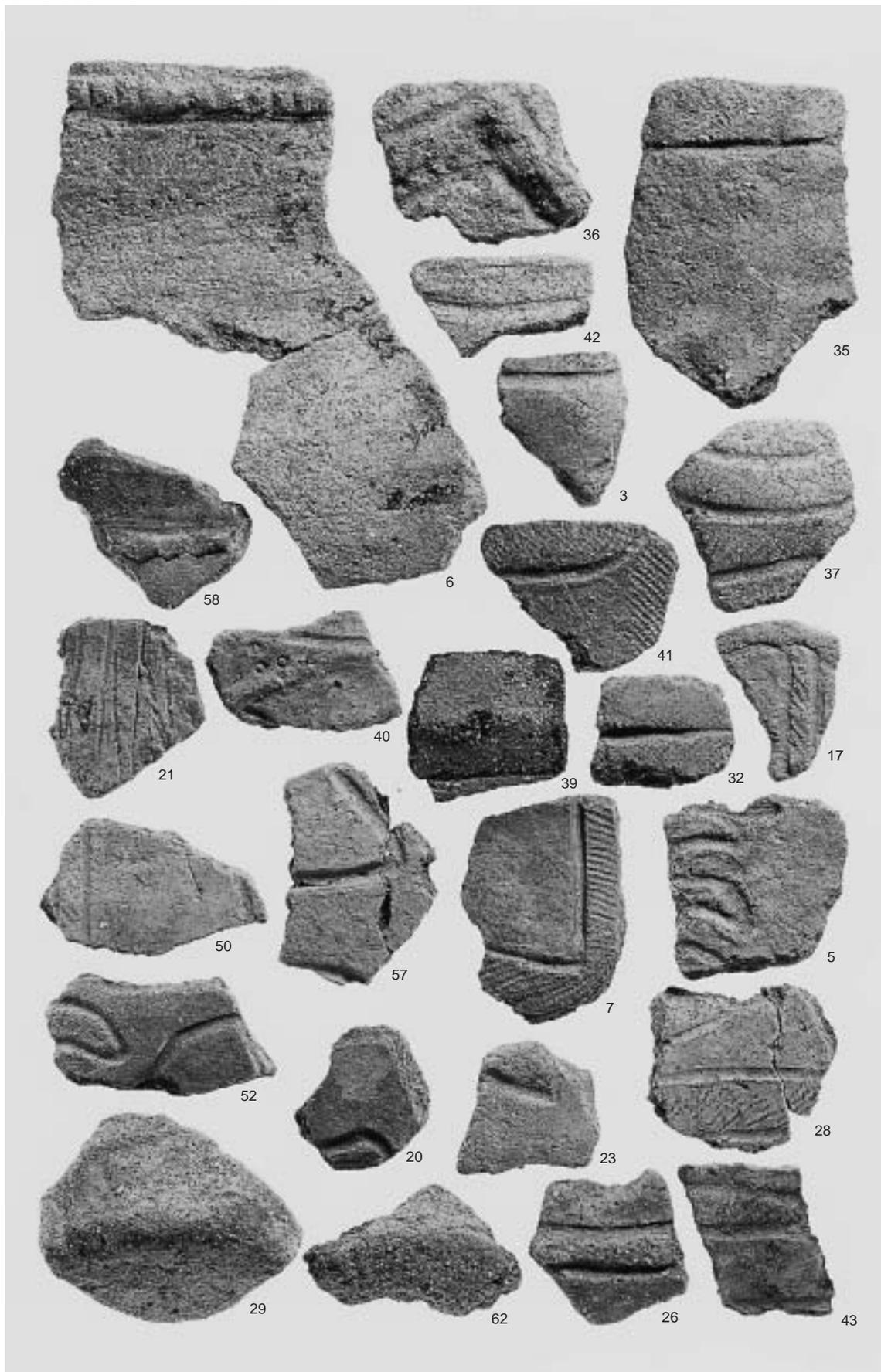
(6) 竪穴住居SH66810 (北西から)



(5) 土坑SK66805 (南東から)



(7) SH66810・かまど部 (北東から)



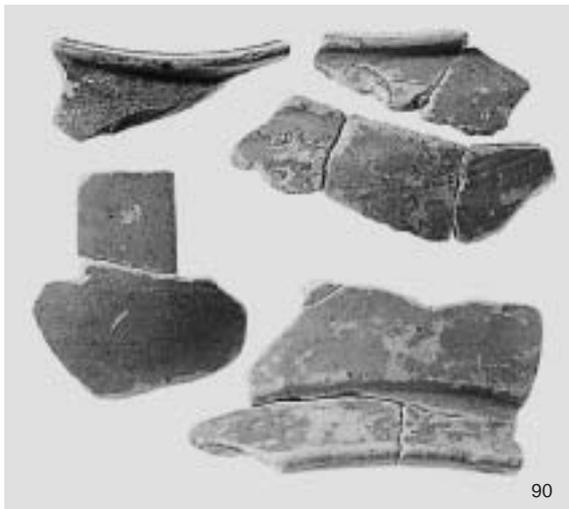
包含層出土縄文土器



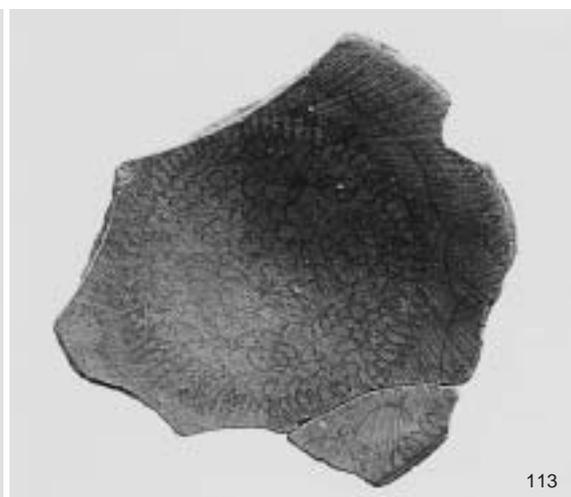
(1) 土器棺墓SX66806出土遺物



(2) 包含層出土石器



(3) 溝SD66808出土遺物



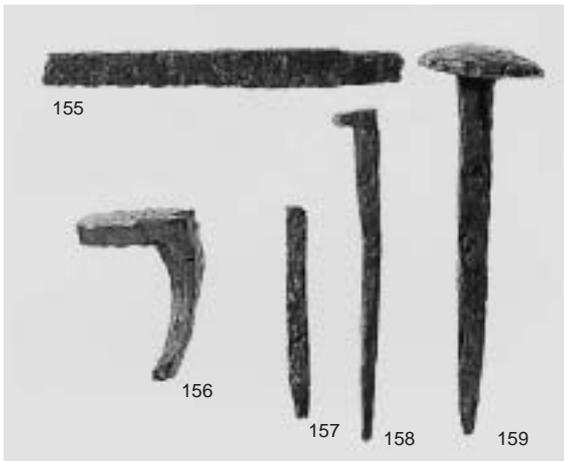
(4) 溝SD66809出土遺物 - 1

長岡京跡右京第668次調査

図版十



(1) 溝SD66809出土遺物 - 2

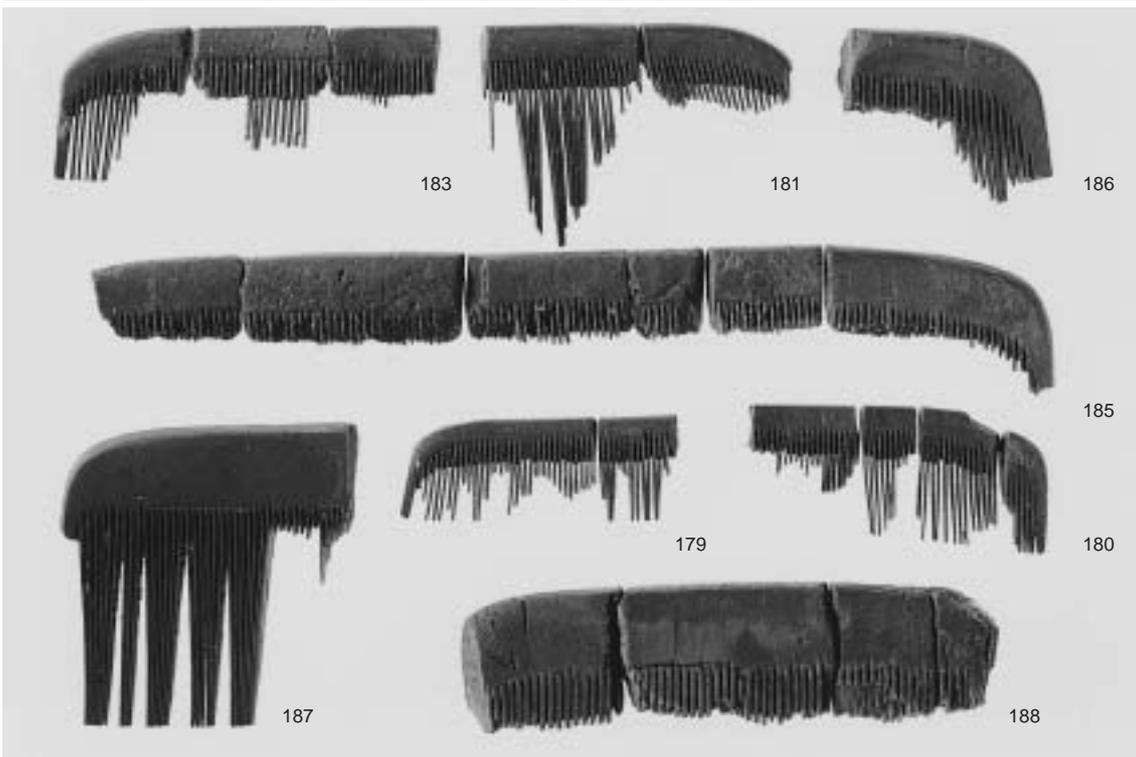
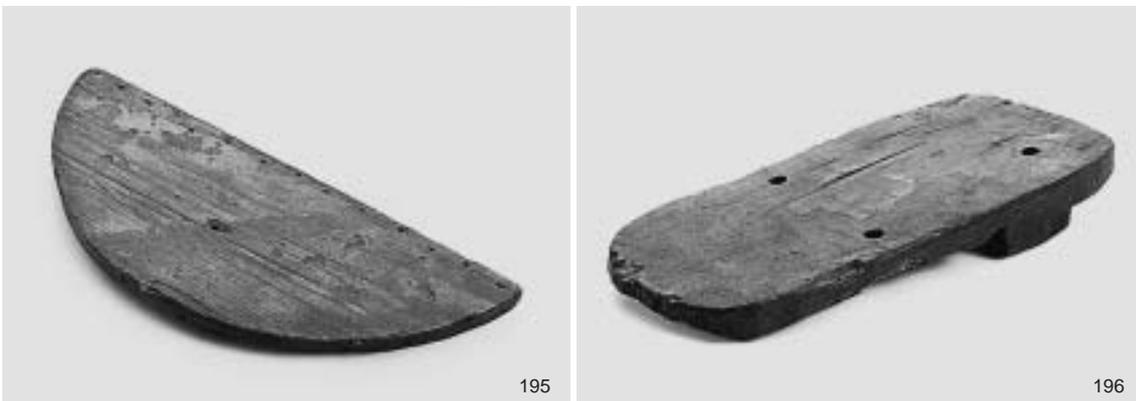


(2) 井戸SE66801下層出土遺物 - 1



長岡京跡右京第668次調査

図版十二





井戸SE66801上層出土遺物 - 1

長岡京跡右京第668次調査

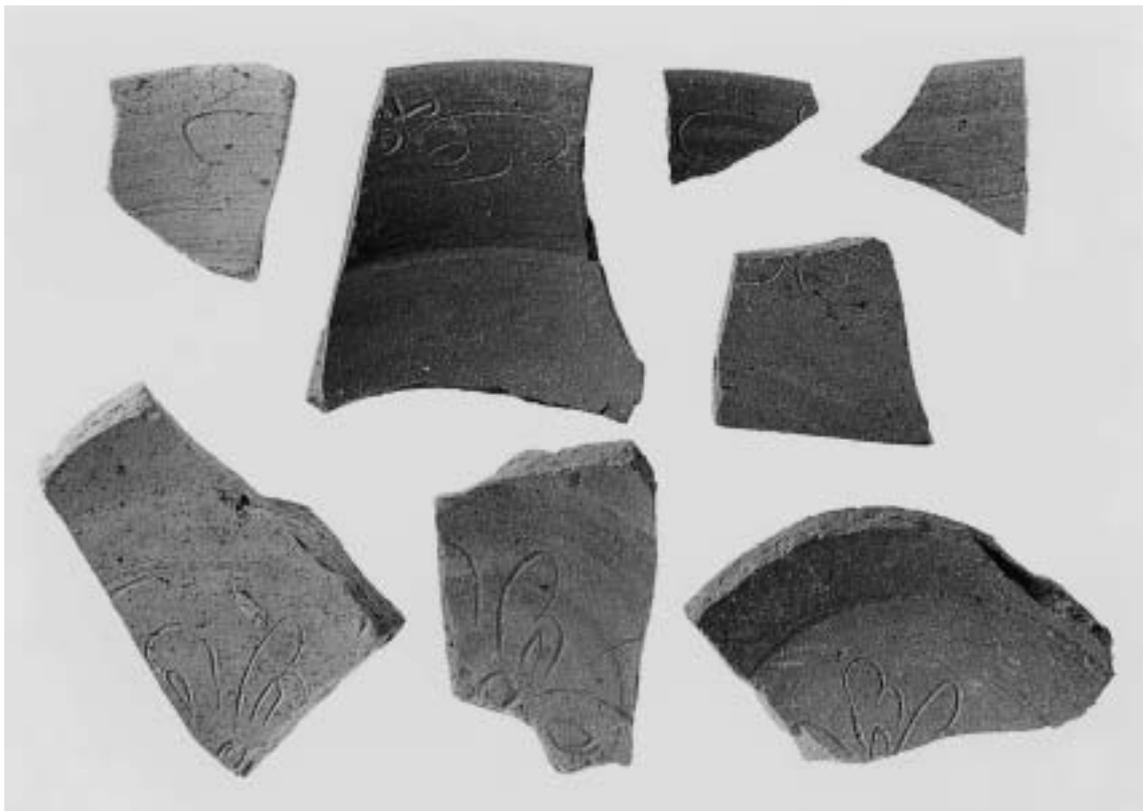
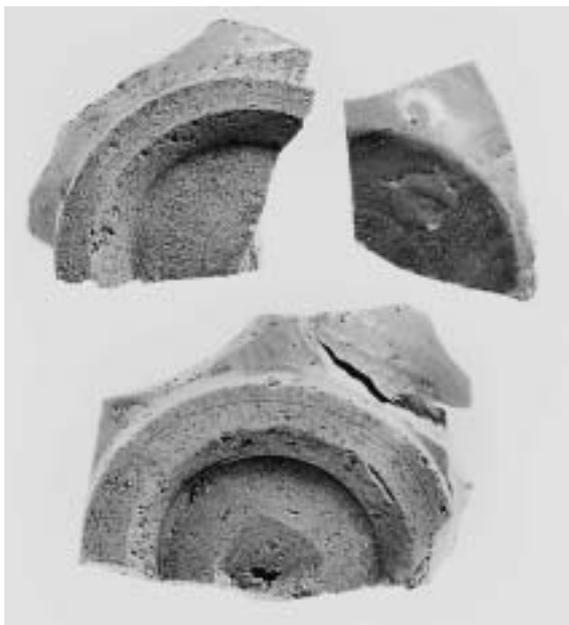
図版十四



(1) 井戸SE66801上層出土遺物 - 2



(2) 包含層出土遺物 - 1

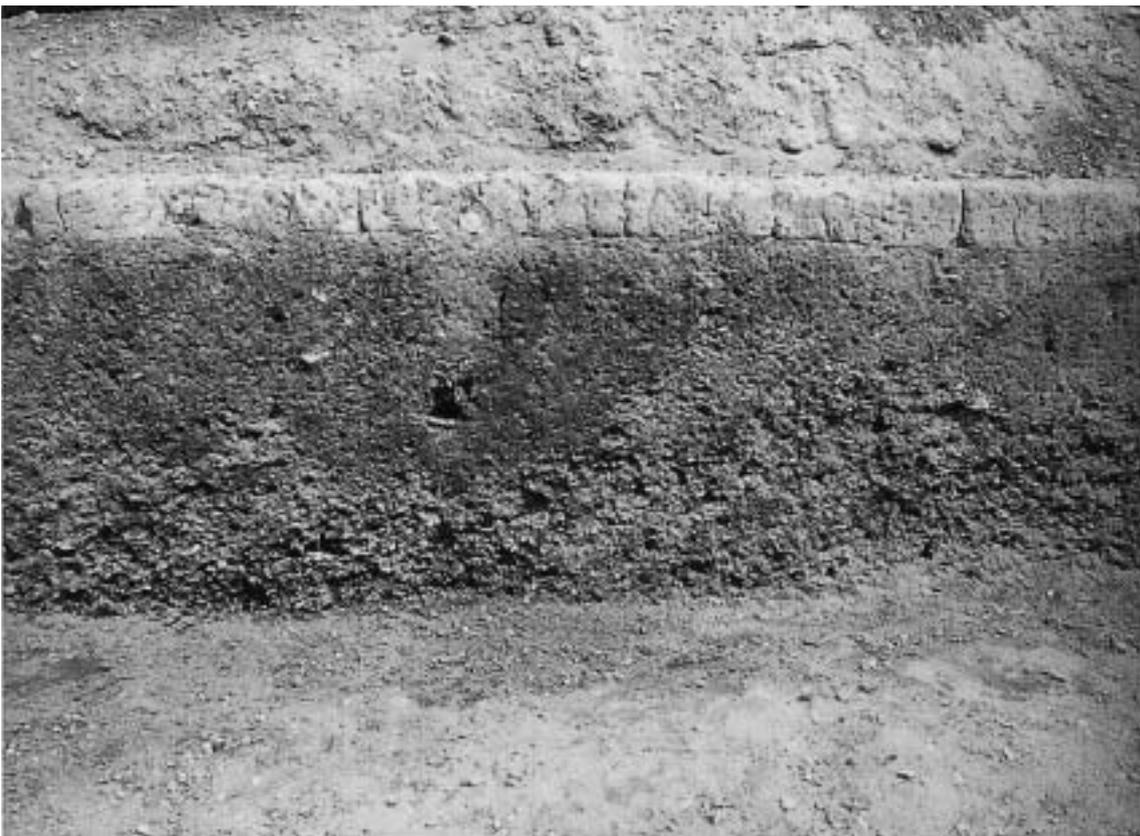


長岡京跡右京第201次調査

図版十六



(1) 右京第201次調査区全景 (南から)



(2) 右京第201次調査区東壁断面 (西から)



(1) 井戸SE20132(南から)



(2) 溝SD20130断面(南東から)



(3) 下層自然流路断面(北から)



(4) 下層自然流路(北から)

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第21集

平成13(2001)年6月25日 印刷

平成13(2001)年6月29日 発行

編集発行 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

〒617 - 0853

京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075 - 955 - 3622(代)

FAX 075 - 951 - 0427

印刷 (株)ぎょうせい 関西支社

〒530 - 8688

大阪市北区天満2丁目7番17号

電話 06 - 6352 - 2271(代)

FAX 06 - 6355 - 2860